宮城県文化財調査報告書第57集

宮城県文化財発掘調査略報

（昭 和 53 年 度 分）

昭和 54 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

公共事業の推進に伴って、全国的に国土の開発が活発化し、本県においても東北自動車道や東北新幹線の建設、ほ場整備や工場用地の造成など大規模な開発工事が急ピッチで進められております。

これによって、文化財の消滅する例が増加しておりますが、文化財は祖先の遺産として貴重であるばかりではなく、これに接する人々の心を豊かにしてくれるものです。

宮城県教育委員会では破壊されていく埋蔵文化財の記録保存をするため、今年度は東北自動車道３遺跡、東北新幹線２遺跡、一般遺跡では遺構確認調査を含めて31遺跡の発掘調査を実施いたしました。

そのうち単独で報告書が刊行される遺跡を除く14遺跡についての概略を収録したものが本書です。報告書が刊行されるまでの研究資料として文化財の保護活用に貢献できれば幸いと存じます。

本書を刊行するにあたり、発掘調査以来御理解と御協力をいただきました関係各位に対し心から感謝の意を表するとともに、皆様方のお役に立つことを切に念願いたします。

昭和54年３月

宮城県教育委員会　　教　育　長　北　村　　潮

例　　言

1．本書は昭和53年度発掘届（通知）一覧、昭和53年度発掘調査遺跡分布図を掲載し、昭和53年度東北自動車道関係遺跡（３遺跡）、東北新幹線関係遺跡（２遺跡）、一般開発関係遺跡（９遺跡）の調査内容を簡略にまとめたものである。これらの遺跡の詳細な報告は、後日、正式報告書として刊行する予定である。

2．本書収録遺跡の発掘調査は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、各市町村教育委員会、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、各学校教職員の協力を得た。

3．東北自動車道、東北新幹線関係遺跡の発掘調査にあたっては、東北大学名誉教授、現東北学院大学教授伊東信雄氏、東北大学農学部教授庄司定雄氏の御指導を得た。また、夷穴横穴古墳群の発掘調査にあたっては、東北大学名誉教授奥津春生氏、南最知貝塚の発掘調査にあたっては、東北大学医学部助手百々幸雄氏の御指導を得た。

4．本書収録の図面、写真等は最小限にとどめた。なお、一般開発関係遺跡に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行のものを複製したものである。（承認番号昭54年東複第29号）

5．本書の編集、図版等の作成、内容の検討については、宮城県文化財保護課調査係が行なった。各遺物の担当者は文末に記した。

目　　次

序

昭和53年度発掘調査遺跡分布図

昭和53年度発掘届（通知）一覧

Ⅰ．東北自動車道関係遺跡

(1) 御駒堂遺跡（第２次） …… 8
(2) 宇南遺跡 …… 12
(3) 鶴ノ丸遺跡（第３次） …… 16

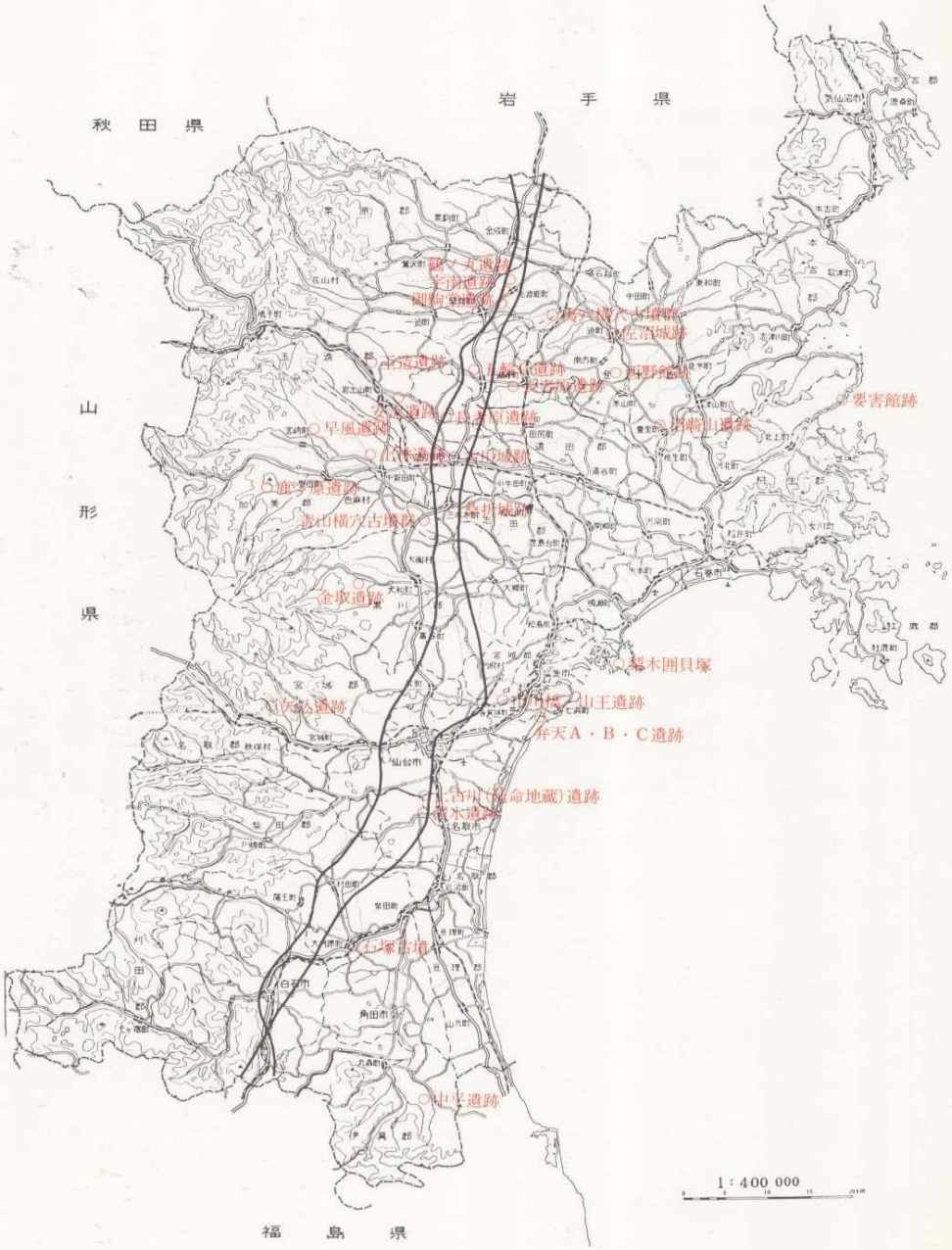
Ⅱ．東北新幹線関係遺跡

(1) 清水遺跡（第４次） …… 28
(2) 上古川（延命地蔵）遺跡 …… 32

Ⅲ．一般開発関係遺跡

(1) 市川橋・山王遺跡 …… 38
(2) 金取遺跡 …… 68
(3) 桑折城跡 …… 72
(4) 要害館跡 …… 88
(5) 佐沼城跡 …… 102
(6) 沼崎山遺跡 …… 120
(7) 夷穴横穴古墳群 …… 126
(8) 南最知遺跡 …… 132
(9) 中平遺跡 …… 136

宮城県文化財調査報告書一覧



1978(昭和53)年度発掘調査遺跡分布図

1978(昭和53)年度発掘届(通知)一覧

整理番号	遺跡名	所在地	原因	調査主体者	調査担当者	遺跡の性格
1	寺下横穴古墳群	三本木町	宅地拡張			横穴古墳群
2	枡江遺跡	仙台市	小学校建設事前調査	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会社会教育課古窯跡研究会	集落跡…奈良・平安時代 貝塚跡…奈良時代
3	高柳B遺跡	仙台市	モーターブール及び付属建物			包含地…奈良・平安時代
4	鶴巻I遺跡	仙台市	土地区画整理事業			包含地…平安時代
5	鶴巻II遺跡	仙台市	土地区画整理事業			包含地…平安時代
6	田子遺跡	仙台市	土地区画整理事業			包含地…奈良・平安時代
7	北屋敷前遺跡	仙台市	土地区画整理事業			包含地…奈良・平安時代
8	国分寺館跡	仙台市	都市計画公園事業			城館…中世
9	大浜遺跡	石巻市	林道開設事業事前調査	石巻市教育委員会	石巻市文化財保護委員 木村敏郎	製塩遺跡…平安時代
10	北小松遺跡	田尻町	農道整備事業			集落跡…縄文時代
11	山口遺跡	仙台市	土地区画整理事業事前調査	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会社会教育課	包含地…奈良・平安時代
12	鹿松貝塚	石巻市	住宅建設			貝塚…縄文時代
13	米泉館跡	宮崎町	上水道配水池築造工事			城館…中世
14	米泉館跡	宮崎町	県道拡幅工事			城館…中世
15	日向前横穴古墳群	田尻町	東北新幹線建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	横穴古墳群
16	宮崎貝塚	石越町	畑改良工事			貝塚…縄文時代
17	上黒沢中館跡 〃上館跡	色麻町	県道拡幅工事			城館…中世
18	南小泉遺跡	仙台市	宅地造成			集落跡…弥生・古墳・奈良平安時代
19	野崎館跡	鳴瀬町	上水道配水池築造工事			城館…中世
20	城生遺跡	中新田町	住宅建設			古代城柵跡（推定地）
21	中屋敷前遺跡	大河原町	都市計画路側帯工事			包含地…奈良・平安時代
22	西岡遺跡	中新田町	基地整備			包含地…古代
23	仙台城旧二の丸跡	仙台市	貯水槽取設			城館…近世
24	金剛寺貝塚	名取市	放牧用電気柵敷設			貝塚…縄文時代
25	中新田城跡	中新田町	宅地造成			城館…中世
26	古館跡	大和町	県営圃場整備			城館…中世
27	三輪田遺跡	古川市	養豚舎建設（土取）			集落跡…奈良・平安時代
28	三輪田遺跡	古川市	養豚舎建設事前調査	古川市教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…奈良・平安時代
29	野山遺跡 野山貝塚	七ケ浜町	七ケ浜ニュータウン建設事前調査	七ケ浜町教育委員会	日本考古学協会員 三宅崇	包含地…縄文・弥生時代 貝塚…縄文・平安時代
30	五輪A遺跡	高清水町	神社移転			包含地…縄文・古墳時代
31	宇南遺跡	志波姫町	東北自道車道建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…奈良・平安時代 城館…中世
32	鶴ノ丸遺跡	志波姫町	東北自動車道建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…古墳・奈良・平安時代 城館…中世
33	人来田遺跡	仙台市	宅地造成			包含地…縄文・弥生時代
34	針遺跡	大衡村	県道凍雪害防止工事			包含地…奈良・平安時代
35	城生遺跡	中新田町	遺跡の範囲・遺構確認調査	中新田町教育委員会	中新田町教育委員会	古代城柵跡（推定地）
36	夾穴横穴古墳群	岩柳町	急傾斜地崩壊防止対策事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	横穴古墳群
37	館前遺跡	多賀城市	宅地造成			包含地…奈良・平安時代・中世
38	長者原遺跡	古川市	送電線鉄塔建設			包含地…縄文時代
39	大瀬遺跡	古川市	送電線鉄塔建設			包含地…縄文時代
40	立輪遺跡	大和町	圃場整備			包含地…縄文時代
41	小鶴城跡	仙台市	住宅建設			城館…中世
42	矢込遺跡	宮城町	県道特殊改良第一種工事			包含地…縄文時代
43	涌谷城跡	涌谷町	城山掘削及び県道付替工事			城館…中世・近世
44	作田山館跡	山元町	ドライブインの建設			城館…中世
45	山下館跡	山元町	宅地造成・公園			城館…中世
46	御駒堂遺跡	志波姫町	東北自動車道建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…奈良・平安時代
47	下塩の入遺跡	岩沼市	ほ場整備			包含地…縄文時代
48	宇南遺跡	志波姫町	県営ほ場整備事業事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…古墳・奈良・平安時代 城館…中世

整理番号	遺跡名	所在地	原因	調査主体者	調査担当者	遺跡の性格
49	六反田遺跡	仙台市	社宅建設事前調査（第3次）	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会社会教育課	集落跡…縄文・弥生・奈良平安時代 古墳
50	十三塚遺跡	名取市	環境整備の基礎資料	名取市教育委員会	名取市教育委員会社会教育課	集落跡…縄文時代・弥生・古墳
51	千石城跡	松山町	貯水槽建設			城館…中世
52	長者原遺跡	瀬峰町	宅地造成事前調査	瀬峰町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…奈良・平安時代
53	長嶋遺跡	色麻町	県道改良工事			集落跡…古墳時代
54	夷穴横穴古墳群	若柳町	急傾斜地崩壊防止対策			横穴古墳
55	吉岡古館跡	大和町	スポーツ広場建設			城館…中世
56	川添東遺跡	仙台市	製材所建設			包含地…縄文時代
57	弁天A・B・C遺跡	七ケ浜町	工場用地造成			包含地…奈良・平安時代
58	茂庭地内所在遺跡	仙台市	都市計画・宅地造成			包含地…縄文時代 城館…中世
59	毘沙門堂遺跡	宮崎町	県道改良工事			集落跡…奈良・平安時代
60	王塚古墳	南方町	宮城県沖地震による崩壊土砂除去			円墳
61	伊治城跡	築館町	遺跡の範囲確認	宮城県教育委員会	宮城県多賀城跡調査研究所	伊治城跡（擬定地）
62	南小泉遺跡	仙台市	公園造成工事			集落跡…弥生・古墳・奈良 平安時代
63	羽黒台遺跡	仙台市	下水管伏設工事			集落跡…縄文・奈良・平安時代
64	愛宕館跡	松島町	宮城県沖地震での崩壊部分工事			城館…中世
65	安沢遺跡	岩出山町	県道改良工事			包含地…縄文・弥生・平安時代
66	早風遺跡	宮崎町	運動場造成			集落跡…奈良・平安時代
67	中平遺跡	丸森町	ほ場整備事業事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…奈良・平安時代
68	若林城跡	仙台市	宮城県沖地震による崩壊に伴う工事			城館…中世・近世
69	中島貝塚	亘理町	学術調査	志間泰治	志間泰治	貝塚…縄文時代
70	南最知貝塚	気仙沼市	宅地造成計画事前調査	気仙沼市教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	貝塚…縄文時代
71	高畑遺跡	丸森町	道路改良工事			包含地…縄文時代
72	国分鞭館跡	仙台市	旧歩兵第四連隊兵舎移築工事			城館…中世
73	宇南遺跡	志波姫町	範囲確認調査に基づく切土部分の事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…古墳・奈良・平安時代 城館…中世
74	大久保下遺跡	田尻町	圃場整備			包含地…縄文時代
75	桑折館跡	三本木町	宮城県沖地震崩壊部分工事			城館…近世
76	堤の内横穴古墳群	亘理町	宅地造成			横穴古墳
77	朝日古墳	岩沼市	土地区画整理事業			古墳
78	愛宕館跡	松島町	宮城県沖地震崩壊部分工事			城館…中世
79	朝日古墳	岩沼市	土地区画整理事業事前調査	岩沼市教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	古墳
80	清水遺跡	名取市	東北新幹線建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…古墳・奈良・平安時代
81	上古川（延命地蔵）古墳	仙台市	東北新幹線建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	盛土遺構…近世
82	五輪C遺跡	高清水町	道路整備事業計画一般国道4号高清水バイパス改築工事			集落跡…奈良・平安時代
83	鹿原遺跡D地区	小野田町	薬莫山麓開発総合酪農組合の酪農施設設置事前調査	小野田町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	包含地…旧石器時代
84	南小泉遺跡	仙台市	宅地造成学術調査	（株）丸三土地開発	加藤孝	集落跡…弥生・古墳・平安時代
85	松崎古墳	角田町	宅地造成			古墳
86	宮崎城跡	宮崎町	「城山線」の開設木材搬出一般林道			城館…中世
87	舟場遺跡	三本木町	グランド造成（簡易グランド）			包含地…奈良・平安時代
88	石塚古墳	柴田町	宅地造成事前調査	柴田町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	古墳
89	佐沼城跡	迫町	近隣工団整備事業			城館…中世
80	屋敷浜貝塚	石巻市	林道開設事前調査	石巻市教育委員会	木村敏郎	貝塚…縄文時代
91	合戦原瓦窯跡	岩出山町	道路新設			瓦窯跡…奈良・平安時代
92	遠見塚古墳	仙台市	一般国道4号、B・P・改築工事			古墳（前方後円墳）
93	多賀城跡	多賀城市	宅地造成・住宅建築			国府跡…奈良・平安時代
94	東山遺跡	宮崎町	簡易農道開設			集落跡…奈良・平安時代
95	羽黒台遺跡	仙台市	下水管伏設工事学術調査	（株）長澤組（長澤巌）	加藤孝	集落跡…縄文・奈良・平安時代
96	五輪C遺跡	高清水町	道路整備事業事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…奈良・平安時代
97	沼崎山遺跡	豊里町	小学校建設			集落跡…縄文・奈良・平安時代 経塚…中世

整理番号	遺跡名	所在地	原因	調査主体者	調査担当者	遺跡の性格
98	沼崎山遺跡	豊里町	小学校建設事前調査	豊里町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	集落跡…縄文・奈良・平安時代 経塚…中世
99	北屋敷遺跡	仙台市	コミュニテーセンター建設工事			集落跡・包含地…平安時代
100	北屋敷遺跡	仙台市	コミュニテーセンター建設工事事前調査	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会社会教育課	集落跡・包含地…平安時代
101	御殿館跡	宮城町	小規模林道開設工事			城館…中世
102	要害館跡	北上町	貯水槽建設			城館…中世
103	要害館跡	北上町	貯水槽建設事前調査	河北地区教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	城館…中世
104	羽山館跡	白石市	砕石事業			城館…中世
105	枡江遺跡	仙台市	宅地造成			集落跡…奈良・平安時代 貝塚跡…奈良時代
106	南小泉遺跡	仙台市	住宅新築			集落跡…弥生・古墳・奈良 平安時代
107	佐沼城跡	迫町	近隣公園整備事業事前調査	迫町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	城館…中世
108	垂水囲貝塚	石巻市	住宅建設			貝塚…縄文・弥生・古墳時代
109	銅谷遺跡	岩沼市	山間田の地盤整備			生産遺跡（鉄滓の散布地）
110	山王遺跡	多賀城市	公民館建設			包含地…古墳・奈良・平安時代
111	古川城跡	古川市	校舎改築			城館…中世・近世
112	北山南遺跡	丸森町	道路の拡幅・改良工事			包含地…縄文時代
113	大楯館跡	丸森町	岩石採取事業			城館…中世
114	金取遺跡	大和町	農道工業			包含地…縄文時代
115	金取遺跡	大和町	農道工事事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	包含地…縄文時代
116	王造遺跡	岩出山町	県学園場整備遺跡の範囲確認調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	包含地…縄文時代
117	市川橋遺跡・山王遺跡	多賀城市	仙塩流域下水道事業			包含地…古墳・奈良・平安時代
118	市川橋遺跡・山王遺跡	多賀城市	仙塩流域下水道事業事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	包含地…古墳・奈良・平安時代
119	高畑遺跡	丸森町	道路改良工事	丸森町教育委員会	一條孝夫	包含地…縄文時代
120	館横穴古墳群	山元町	学術調査	志間泰治	志間泰治	横穴古墳
121	古川城跡	古川市	校舎改築事前調査	古川市教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	城館…中世・近世
122	国分寺館跡	仙台市	街路（築造）工事			城館…中世
123	西野館跡	米山町	小学校建設			城館…中世
124	欠ノ上遺跡	仙台市	宅地造成			包含地…奈良・平安時代
125	平形山根貝塚	石巻市	農地改良			貝塚
126	鴻ノ巣遺跡	仙台市	排水沈澱槽設置			集落跡…古墳・奈良・平安 時代・中世
127	十文字館跡	眞理町	田一ほ改良工事			城館…中世
128	北目城跡	仙台市	住宅建設			城館…中世
129	長泉寺古墳群	角田市	道路改良			古墳
130	東光寺城跡	仙台市	改築工事			城館…中世
131	吉田遺跡	米山町	宅地造成			古代城柵跡（推定地）
132	吉田遺跡	米山町	水田客土			古代城柵跡（推定地）
133	吉田遺跡	米山町	宅地造成			古代城柵跡（推定地）
134	根岸遺跡	仙台市	道路改良			集落跡…縄文時代
135	今泉城跡	仙台市	宅地造成			城館…中世
136	上古川(延命地蔵)古墳	仙台市	電気通信線路設置			盛土遺構…近世
137	明屋敷遺跡	仙台市	宅地造成			包含地…中世
138	東光寺城跡	仙台市	納竹堂新築工事			城館…中世
149	寄島館跡	北上町	急傾斜地防止事業			城館…中世
140	水貫山遺跡	石巻市	住宅建設			包含地…平安時代
141	要害館跡	北上町	急傾斜地防止事業			城館…中世
142	砂押Ⅱ遺跡	仙台市	宅地造成			包含地…古墳・奈良・平安時代

Ⅰ　東北自動車道関係遺跡

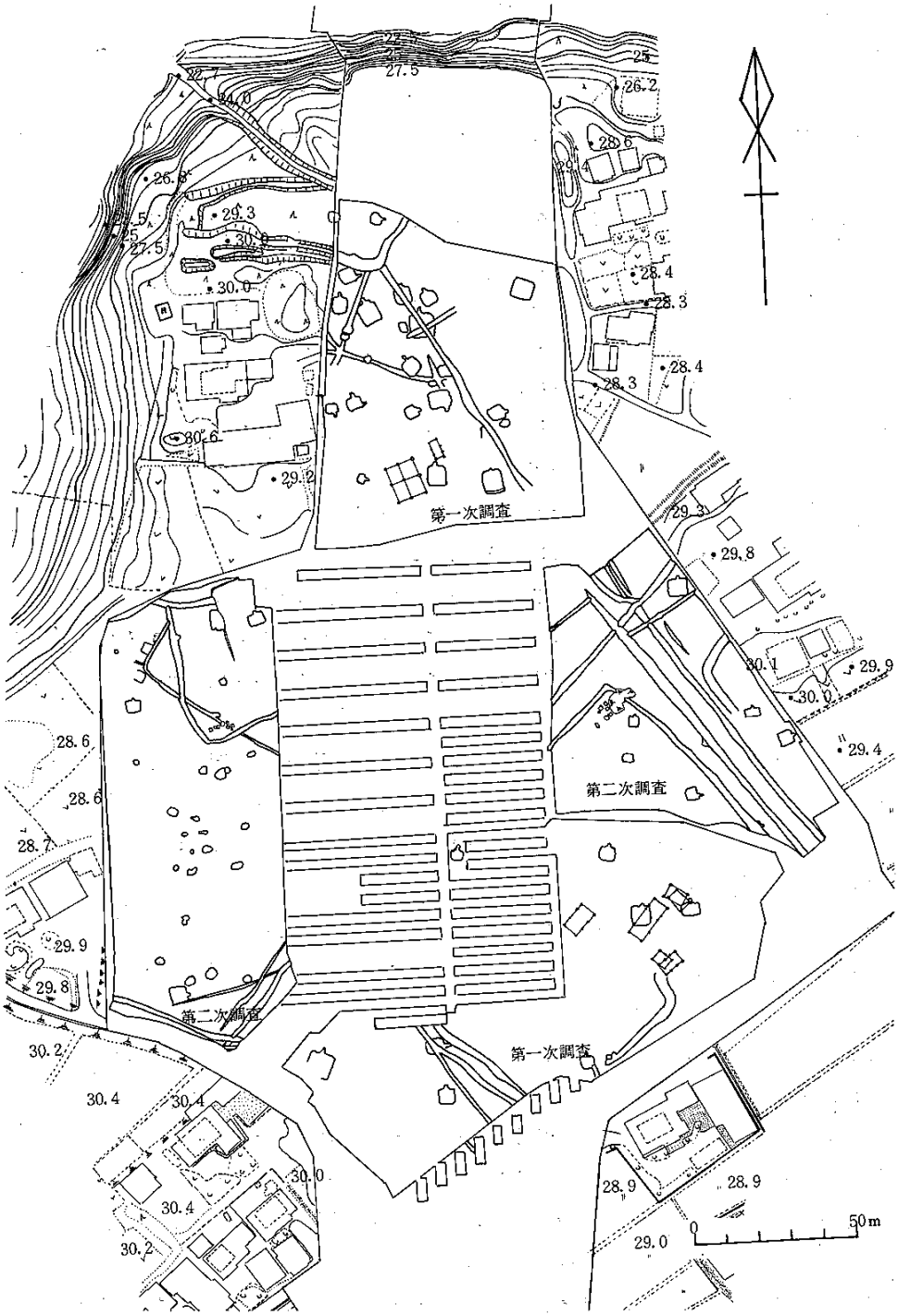
東北自動車道関係遺跡位置図

(1) 御駒堂遺跡

ー第２次調査ー

早坂春一・高橋守克・真山　悟・手塚　均・森　貢喜
太田昭夫　・　熊谷幹男　・　小川淳一　・　小野寺祥一郎

遺跡所在地：栗原郡志波姫町堀口字御駒堂
調 査 期 間：昭和53年６月１日～昭和53年８月19日
調 査 面 積：12000 ㎡
発 掘 面 積：12000 ㎡
遺 跡 記 号：ＢＪ
遺 跡 番 号：49014
調査協力機関：志波姫町教育委員会



御駒堂遺跡遺溝配置図

１．遺跡の立地

御駒堂遺跡は、志波姫町の中心部から北西約1.5㎞、志波姫町堀口御駒堂にある。築館町から志波姫町にかけて平担な台地が延びており、その北側には、一迫川によって形成された沖積地（水田地帯）が広がっている。本遺跡（標高約29m）は、この台地の北部に立地している。

２．調査の概要

昭和51年の第一次調査では、東北自動車道の路線敷とパーキングエリアの一部を含む約22,000㎡を対象に実施し、竪穴住居跡28軒、掘立柱建物跡10棟、土壙７基、井戸跡６基、多数の溝状遺構が検出されている。今回の調査は、第二次調査に当たり、路線敷の西側と東側のパーキングエリア部分を対象に約12,000㎡を発掘した。その結果、竪穴住居跡13軒、土壙19基、井戸跡１基、墓跡18基、溝状遺構20本が検出された。

〈竪穴住居跡〉西側に６軒、東側に７軒の合計13軒検出されている。いずれも、平面形は方形を基調とするものであり、規模は、一辺が約2.5～6.0mとばらつきがあるが、一辺4.0m前後のものが多い。住居跡の壁には、カマドが付設され、煙道が壁外に延びている。カマドの位置は、第６号住居が南壁にあり、その他は、東壁か北壁のいずれかにある。柱穴は、住居跡の対角線上に４個配されるものが多く、６個（住居跡の長軸と平行に３個ずつ対になって）配されるもの、全く無いものなどもある。用溝は、いずれもカマド部分を除いて、住居跡壁下を一巡している。出土遺物から、これらの竪穴住居跡の所属時期は、古墳時代後期から奈良・平安時代に比定できる。

〈土壙〉19基検出されている。規模は、大小さまざまで、平面形は不定形のものが多い。出土遺物がなく、時期や性格は不明である。風倒木痕と考えられるものもある。

〈井戸跡〉西側から１基検出されている。平面形は円形で、径約２m、深さ約２mである。出土遺物がなく、時期は不明である。

〈墓跡〉18基検出されている。平面形は、円形基調のものと方形基調のものとがある。人骨、キセル、磁器（茶碗）、古銭（寛永通宝）などが出土しており、いずれも近世以降のものと考えられる。

〈溝状遺構〉20本検出されている。規模も大小さまざまで、いずれも住居跡よりは新しい。

３．まとめ

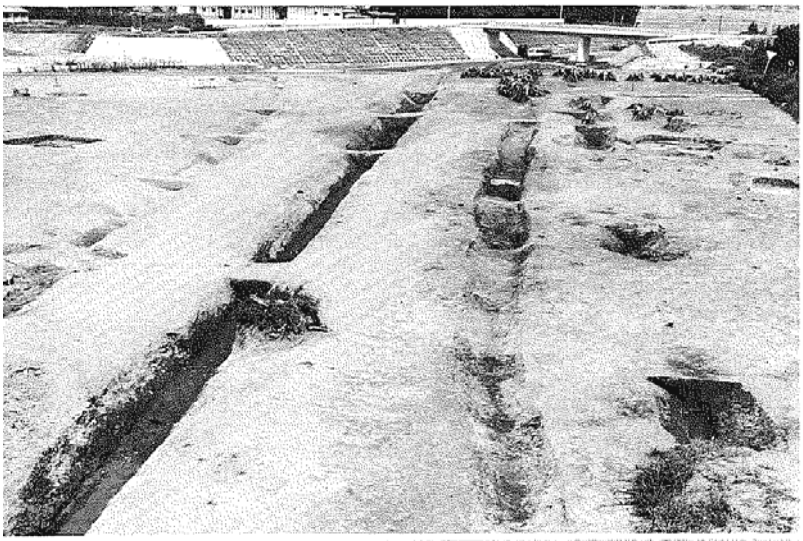
１．御駒堂遺跡は、古墳時代後期から奈良・平安時代、近世にわたる複合遺跡である。

２．古墳時代後期の集落跡は、県内でも発見が少なく、貴重な資料である。

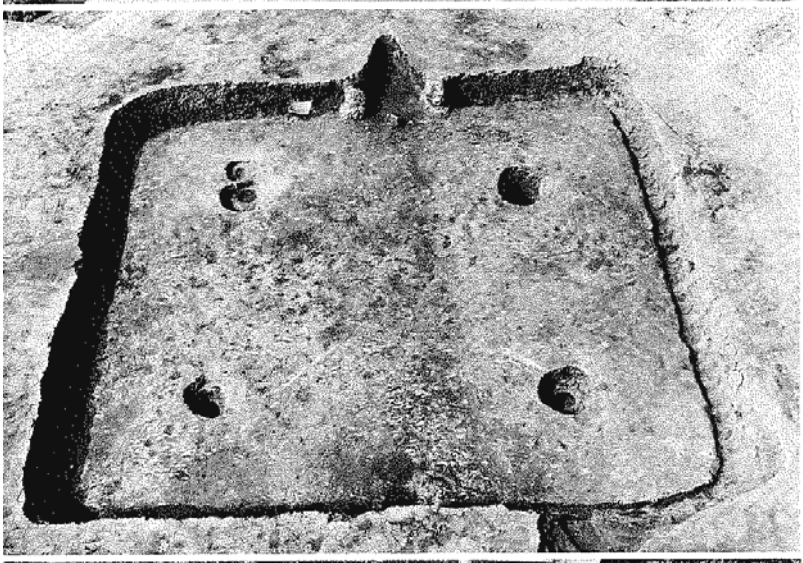
３．御駒堂遺跡は、これまで検出された住居跡の分布と地理的条件を加えると、遺跡はさらに東西に広がると考えられる。

（小野寺祥一郎）

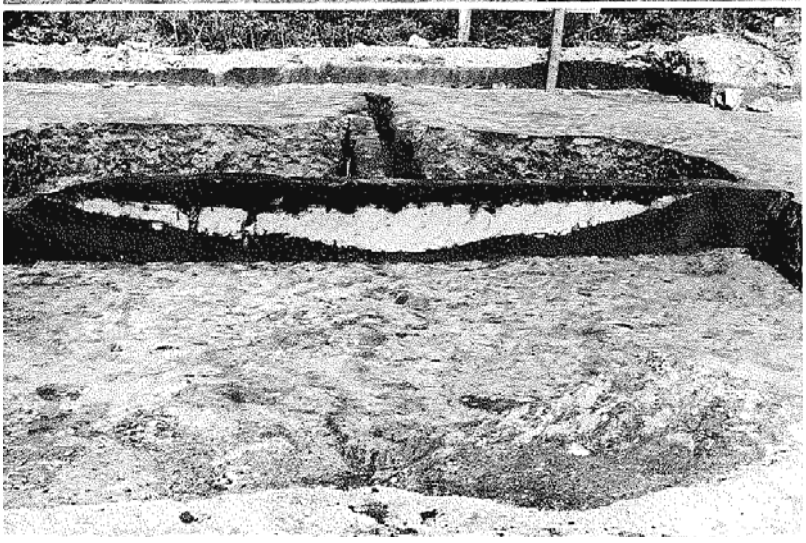
参考文献　宮城県教育委員会(1977)「御駒堂遇跡」『宮城県文化財調査報告書第48集 宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』



御駒堂調査区東側遺構
出土状況（南側から）



第13号住居跡
（南側から）



第12号住居跡堆積状況
（西側から）

(2) 宇（う）南（なん）遺　跡

早坂春一・遊佐五郎・手塚　均・熊谷幹男

遺跡所在地：栗原郡志波姫町八樟字宇南

調 査 期 間：昭和53年４月24日～昭和53年５月31日

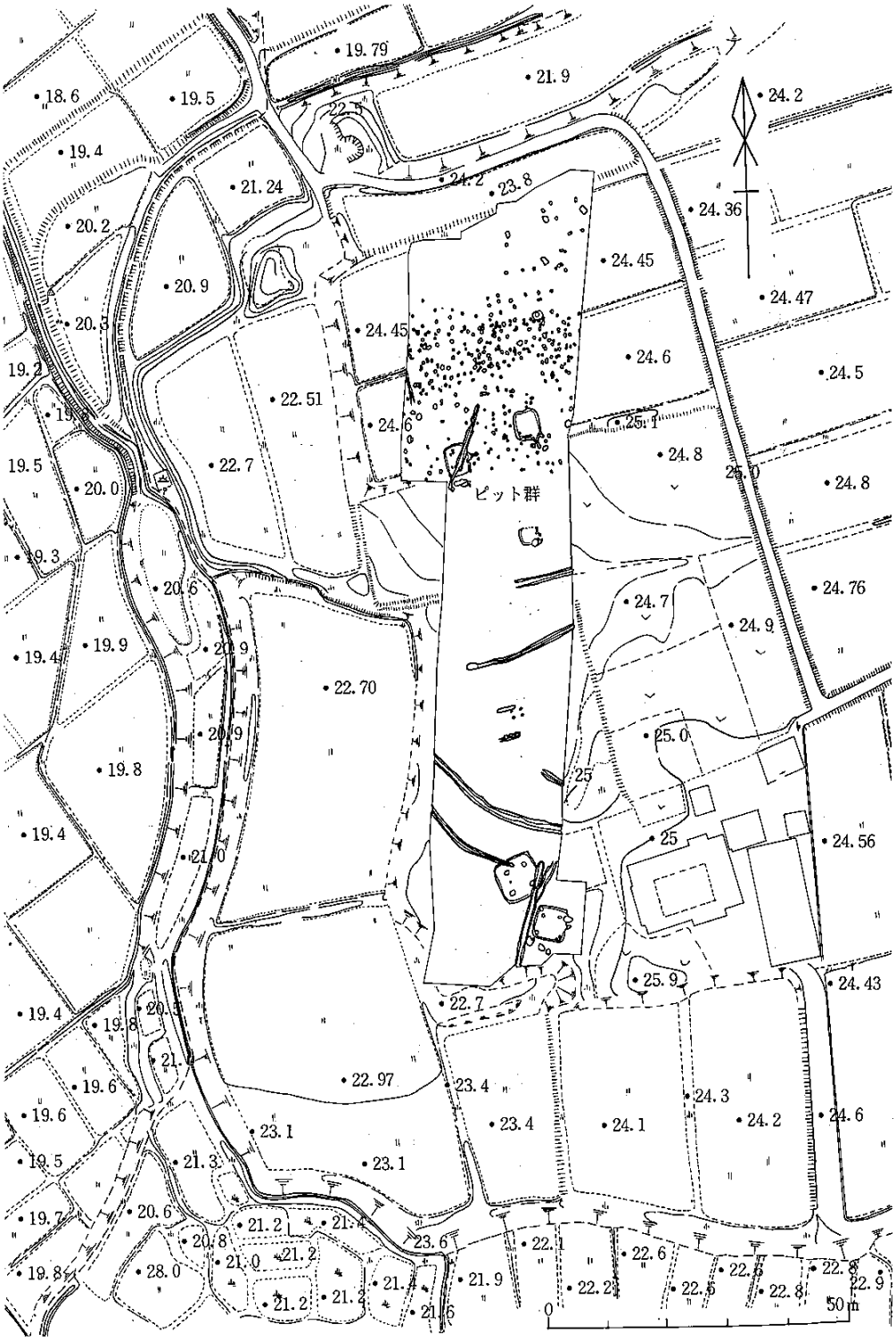
調 査 面 積：6500 ㎡

発 掘 面 積：6500 ㎡

遺 跡 記 号：EU

遺 跡 番 号：49020

調査協力機関：志波姫町教育委員会



宇南遺跡遺構配置図

１．遺跡の立地

宇南遺跡は、志波姫町の中心部から北西約1.8km、志波姫町八樟宇南にある。御駒堂遺跡がある同じ台地上に立地している。遺跡は、湿地（現在は、水田になっている）になっている部分とそれに囲まれた平坦な部分とからなっている。湿地部分と平坦部分（標高約 20m）との比高差は２～５ｍである。

２．調査の概要

本遺跡は、航空写真の観察によって、館跡の可能性が指摘され、昭和52年に遺跡をめぐる南側の部分の水田地帯の試掘を行い、堀が確認された。この堀は館跡に伴うと考えられる。今年度は、東北自動車道の路線敷の部分約 6,500 ㎡を発掘した。その結果、竪穴住居跡５軒、土壙５基、墓跡３基、井戸跡１基、溝状遺構10本、掘立柱建物跡数棟などが検出された。

〈竪穴住居跡〉調査区南側に２軒、北側に３軒の合計５軒検出されている。古墳時代の住居跡１軒、奈良・平安時代の住居跡が４軒である。古墳時代の住居跡は、平面形が方形であり、一辺が約７ｍである。カマドはない。住居跡の中央部に焼け面が認められ、炉跡と考えられる。柱穴は、住居跡の対角線上に４個配されており、周溝は認められなかった。奈良・平安時代の住居跡は、カマドが付設され、カマドの位置は、東壁に付設されたものが多く、南壁のものは１軒だけである。柱穴は、２個及び３個検出されているものもある。しかし、全体としての配置は不明である。また、全くないものもある。周溝は、カマド部分を除いて住居跡の垂直下を一巡するもの、住居跡の一部を巡るもの、全くないものなどさまざまである。

〈土壙〉５基検出されている。いずれも規模がさまぎまで、時期や性格は不明である。

〈墓跡〉３基検出されている。古銭、キセル、鏡などが出土しており、近世以降の墓と考えられる。

〈井戸跡〉１基検出されている。平面形は円形で、径約 1.1m である。完掘していないので深さは不明である。出土遺物がなく、時期は不明である。

〈溝状遺構〉10 本検出されている。規模はさまざまで、時期や性格は不明である。

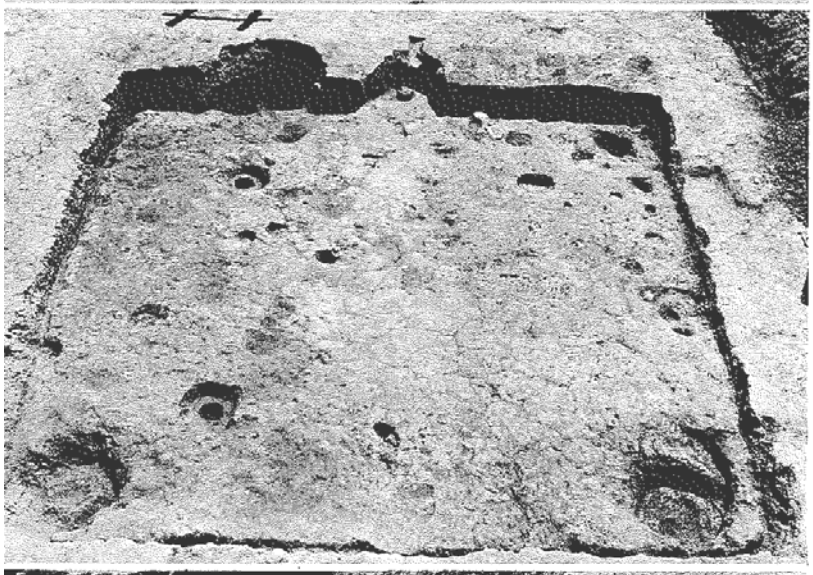
〈掘立柱建物跡〉調査区北側に、多数のピットが検出された。柱穴として認められるものも多く、建物跡が数棟確認できた。これらの建物跡は、館に伴う可能性がある。

３．まとめ

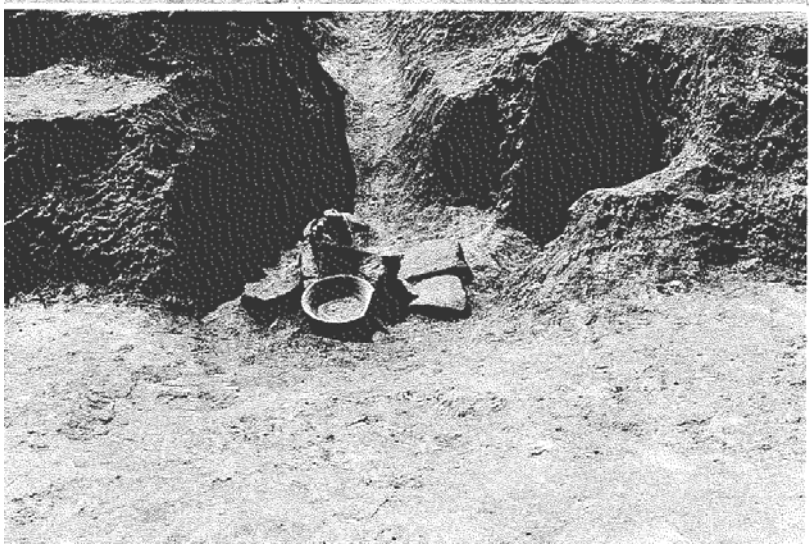
宇南遺跡は、古墳時代から奈良・平安時代にかけて営まれた集落跡であり、中世以降になって館として使用された可能性がある。

（小野寺祥一郎）

宇南遺跡調査区北側の
ピット群（南側から）



第１号住居跡
（西側から）



第４住居跡カマド
（北側から）

(3) 鶴ノ丸遺跡

ー第３次調査ー

斎藤吉弘 ・ 佐々木安彦 ・ 高橋守克 ・ 阿部　恵
森　貢喜 ・ 太田昭夫 ・ 小野寺祥一郎 ・ 小川淳一

遺跡所在地：栗原郡志波姫町八樟字谷地
調 査 期 間：昭和53年４月10日～昭和53年５月31日
調 査 面 積：8180 ㎡
発 掘 面 積：8180 ㎡
遺 跡 記 号：ＢＫ
遺 跡 番 号：49015
調査協力機関：志波姫町教育委員会

１．遺跡の立地

鶴ノ丸遺跡は、志波姫町の中心部から北西約２㎞、志波姫町八樟谷地にある。御駒堂遺跡や宇南遺跡がある同じ台地上に立地している。現在、遺跡は宅地、水田、畑地になっている。遺跡中央部の標高は、約 20m であり、周囲の水田との比高は約２～４ｍである。

２．調査の概要

調査は、東北自動車道の路線敷にかかる部分約 8,180 ㎡を対象に昭和49年に第一次調査、昭和52年に第二次調査が行われ、今回の調査は第三次調査にあたる。

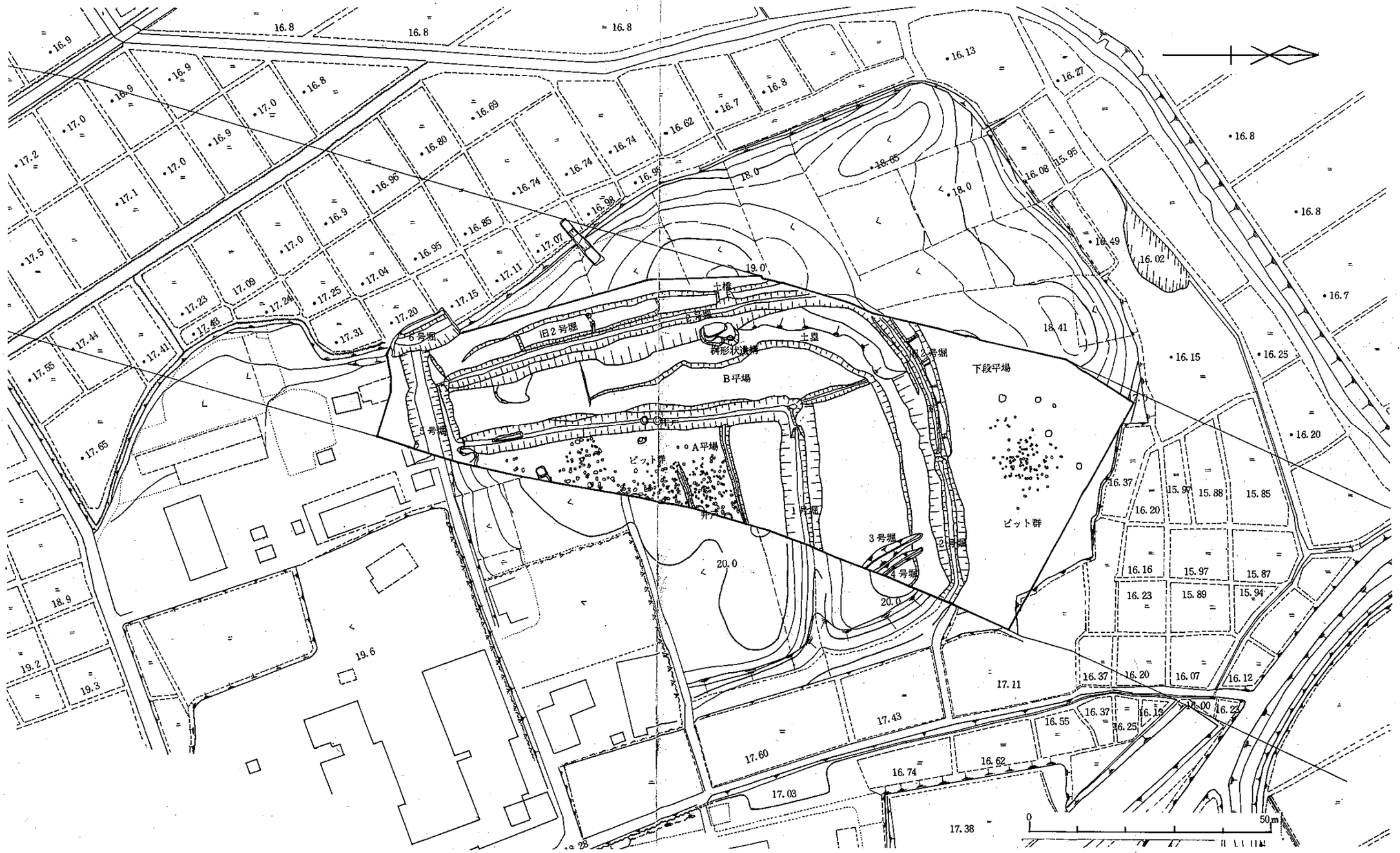
本遺跡は、古くから館跡として知られており、第二次調査までは、主に館跡を中心に調査が進められてきた。その結果、館の構造を知るうえで多大の成果を収めた。今回の調査では、新たに、館に伴う遺構とともに、館構築以前の遺構も多数検出された。第一次から第三次までの調査の結果、次のことが明らかになった。

本館は、自然地形を利用した上・下二段の平場からなる。館の東側及び南側は未調査のため不明であるが、その規模は、東西約 200m、南北約 220m で総面積は約 44,000 ㎡に及ぶと考えられる。上段と下段の平場は、土塁と堀（２号堀、旧２号堀）によって区画されている。土塁は、上段平場北西縁に残っており、最も保存の良いところで基底幅約 6.5m、 高さ１ｍ をこえる。この土塁は、本来は上段平場縁辺にまわっていたと考えられる。上段平場も、堀（１号堀）によって２つ（１号堀の内側をＡ平場、外側をＢ平場とした）に区画されている。下段平場は、上段平場との比高差が約２ｍ で、外縁部（低湿地であり、現状は水田となっている。）へゆるやかに傾斜しながら上段平場を取りまいている。館の西辺は、下段平場と現水田との境にあたり、その部分には堀（６号堀）がめぐる。この６号堀は、さらに調査区の南北に延びることが確認されている。館の北側からは堀が確認されなかった。上段平場南には、５号堀がめぐり、調査区南西隅において６号堀と直交している。６号堀がこの地点から南に延びることが確認されており、館の南辺は、５号堀のさらに南側にあると考えられる。これらのことからかつては、館の西辺では、堀をもって外郭とし、北辺では、自然地形を外郭として利用していたと考えられる。館の南辺は、現在のところ不明である。

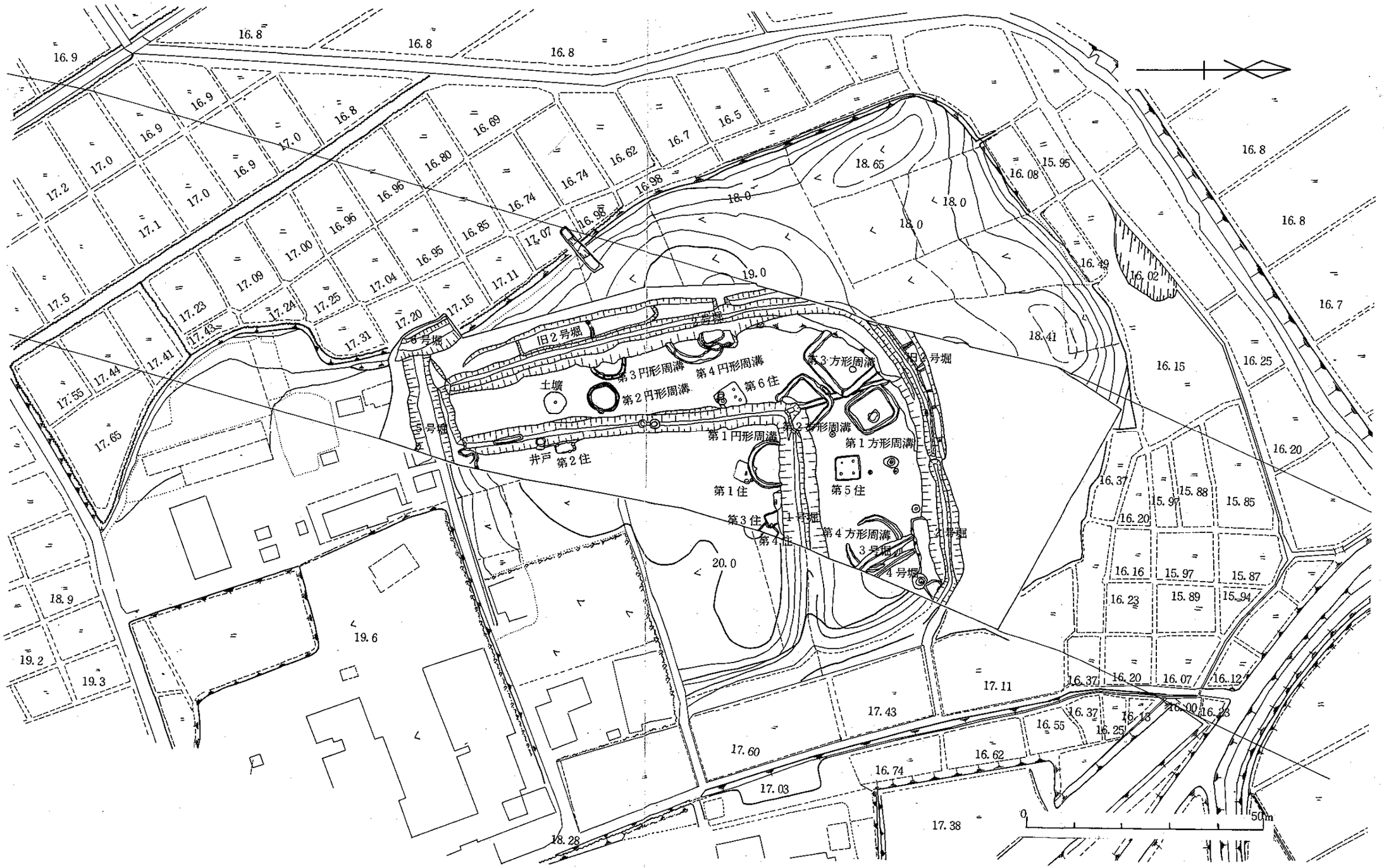
Ａ平場及び館北側下段平場からは、掘立柱建物跡、井戸跡、多数の土壙などが検出されている。Ｂ平場からは土塁以外特に遺構は検出されなかった。

〈掘立柱建物跡〉 Ａ平場及び館北側下段平場から多数のピットが検出された。ピットは、柱穴として認められるものも多く、掘立柱建物跡の存在が考えられる。

〈井戸跡〉 Ａ平場から３基（１号堀底面から検出された２基の井戸跡を含む）、館北側下段平場から１基の合計４基検出されている。１号堀底面から２基並んで検出された井戸跡からは、石臼と木製品が出土した。



鶴ノ丸遺跡遺構配置図（館に伴う遺構）



鶴ノ丸遺跡遺構配置図（館構築以前の遺構）

その他、２号堀によって切られている堀が検出され、２号堀に新旧のあることが認められた。古い堀を旧２号とした。この旧２号堀は、２号堀同様、Ａ平場直下の北辺と西辺をまわる。また、この旧２号堀に附属するものとして、土橋１基が西側で検出された。さらに、この土橋と対応するように２号堀をはさんで桝形状遺構が検出された。

館構築以前の遺構として、方形周溝墓４基、円形周溝４基、竪穴住居跡 6 軒、井戸跡１基、多数の土壙が検出されている。

〈方形周溝墓〉 ４基検出されている。そのうち３基は館に伴う堀などによって切られており、溝が全周するものは１基だけである。いずれも一辺が 10m 前後である。溝が全周する第１方形周溝墓は、一辺が約 10.5m の隅丸方形である。溝幅約 1.2m、深さ約 0.6m で、断面形が「V」字形を呈している。台状部はほぼ平坦である。台状部からは、土壙などの埋葬施設は検出されていない。南側の溝からは、体部に穿孔された土師器の壺などが出土しており、これらは古墳時代前期（塩釜式期）のものと考えられる。

〈円形周溝〉４基検出されている。そのうち３基は、館跡に伴う堀などによって切られており、全周するものは１基だけである。規模はそれぞれ異っており、径約 6.5～12m である。各円周溝の溝からは、弥生土器、古墳時代前期（塩釜式期）の土師器が出土している。台状部からは、土壙などの埋葬施設は検出されていないが、円形周溝墓の可能性がある。

〈竪穴住居跡〉 ６軒検出されている。いずれも平面形は方形を基調とし、一辺約３～６m である。古墳時代前期（塩釜式期）のものが３軒、平安時代（表杉ノ入式期）のものが３軒である。いずれも堀などと重複しており、床面が完全に残っているのは、第５住居跡だけである。

〈井戸跡〉 Ａ平場西辺、１号堀に切られて１基検出されている。平面形は円形で、径約 1.2m である。湧水のため完掘していない。館よりも古いものである。

〈土壙〉縄文時代晩期の土壙１基、奈良時代以降と考えられる擂鉢状の土壙１基を含む多数の土壙が検出されている。規模もさまざまで、時期や性格が判明するものは少ない。

３．まとめ

１．館に伴う遺構として、堀５本、土塁１本、ピット群、土橋、桝形状遺構などが検出され、館の構造を知るうえで貴重な資料が得られた。

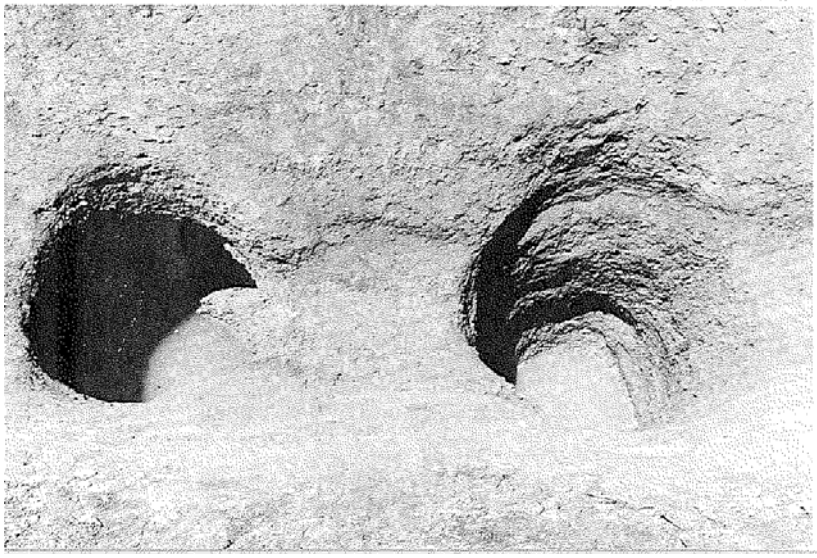
２．館構築以前の遺構として、縄文時代晩期の土壙１基、古墳時代前期の方形周溝墓４基、古墳時代前期の円形周溝４基、竪穴住居跡６軒、井戸跡１基、多数の土壙などが検出された。方形周溝墓は、本遺跡での検出で、宮城県内での発見例は５遺跡となる。また、円形周溝も「墓」の可能性があり、本遺跡での検出で、県内で２遺跡目となる。方形・円形周溝墓の分布のうえから、鶴ノ丸遺跡が現在のところ、方形・円形周溝墓検出の最北限にあたる。

（小野寺祥一郎）

参考文献　宮城県教育委員会「鶴ノ丸館跡」『宮城県文化財調査報告書第40集・宮城県文化財調査略報（昭和48・49 年度分）』
宮城県教育委員会「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書第53集・宮城県文化財調査略報（昭和52 年度分）』

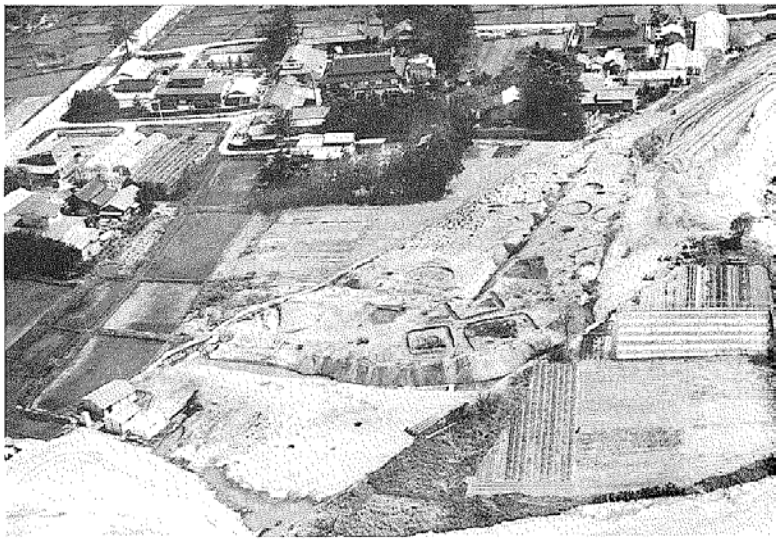
鶴ノ丸遺跡遺跡全景
（北東側から）

2号堀、旧2号堀、土橋
（北側から）

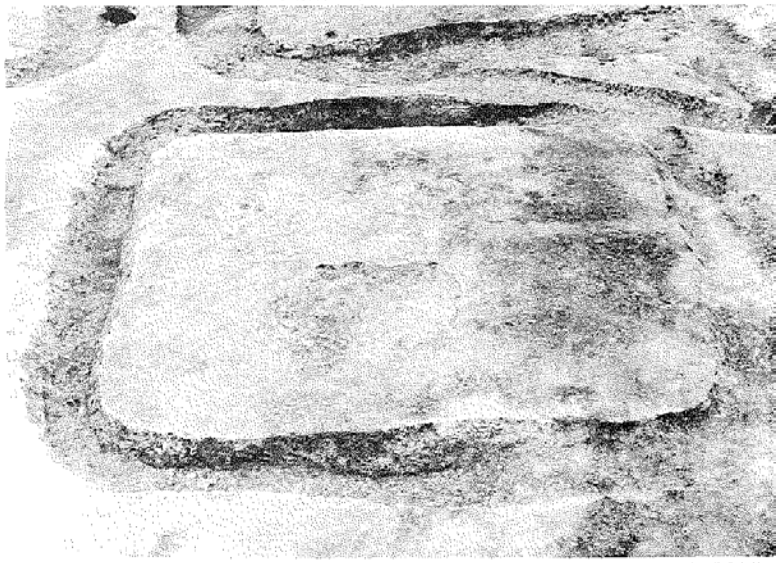


1号堀底面より検出された井戸跡（東側から）

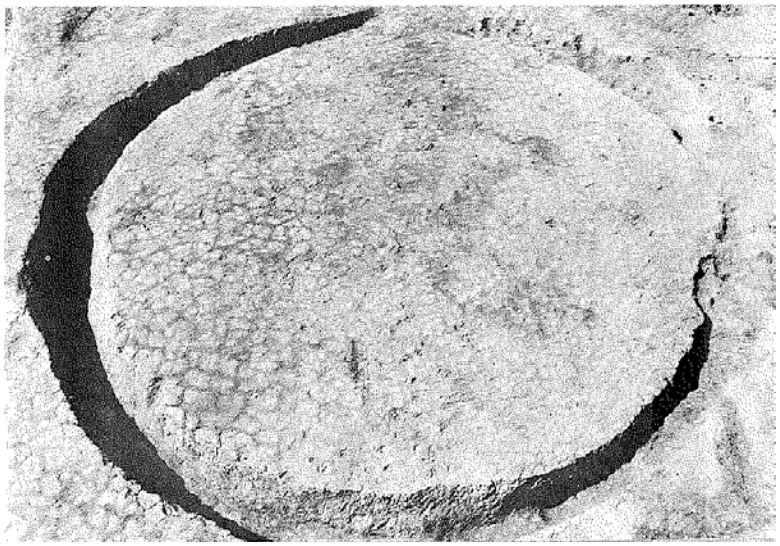
鶴ノ丸遺跡遺跡遠景
（北西側から）



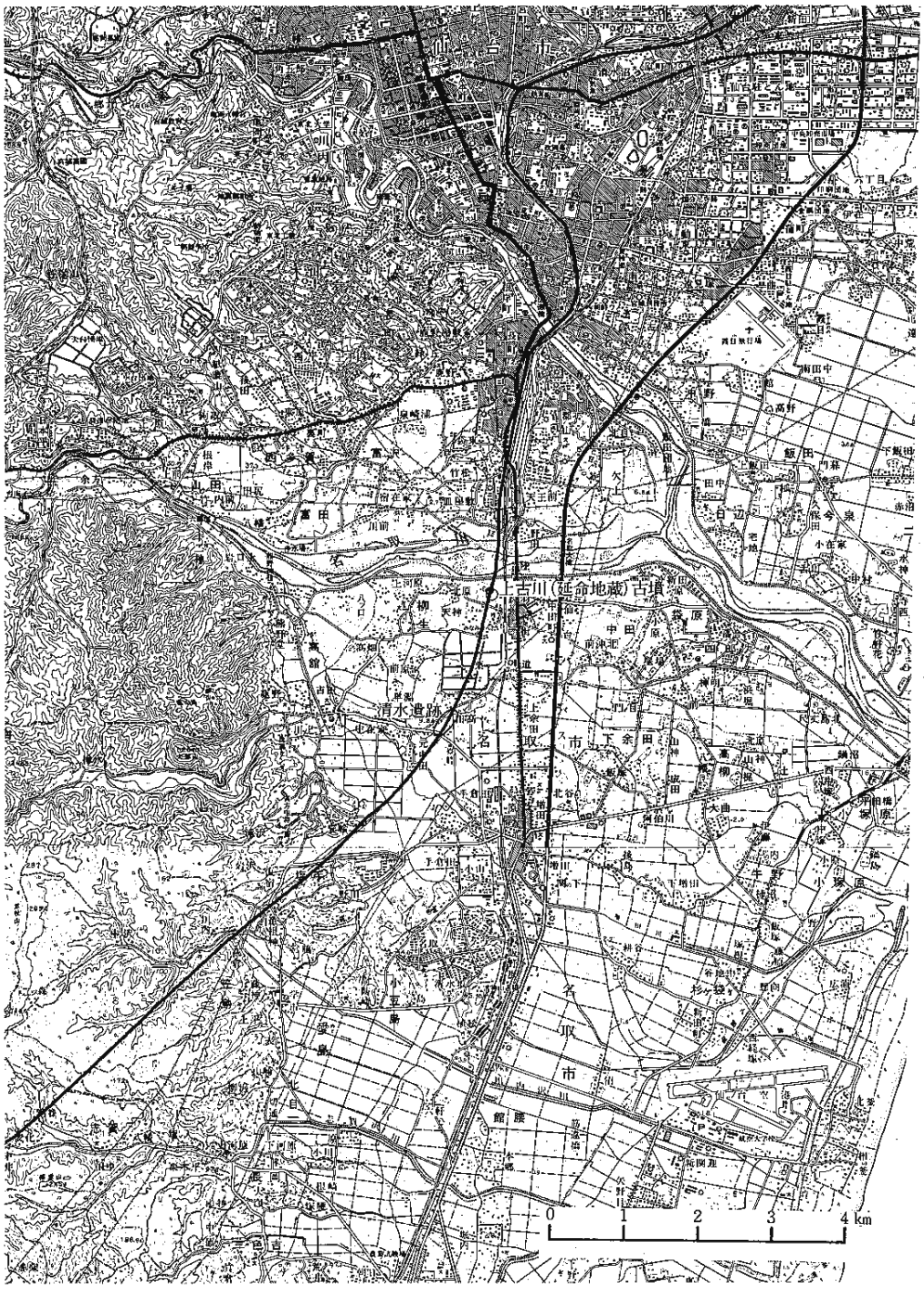
第１方形周溝墓
（東側から）



第２円形溝（南側から）



Ⅱ　東北新幹線関係遺跡



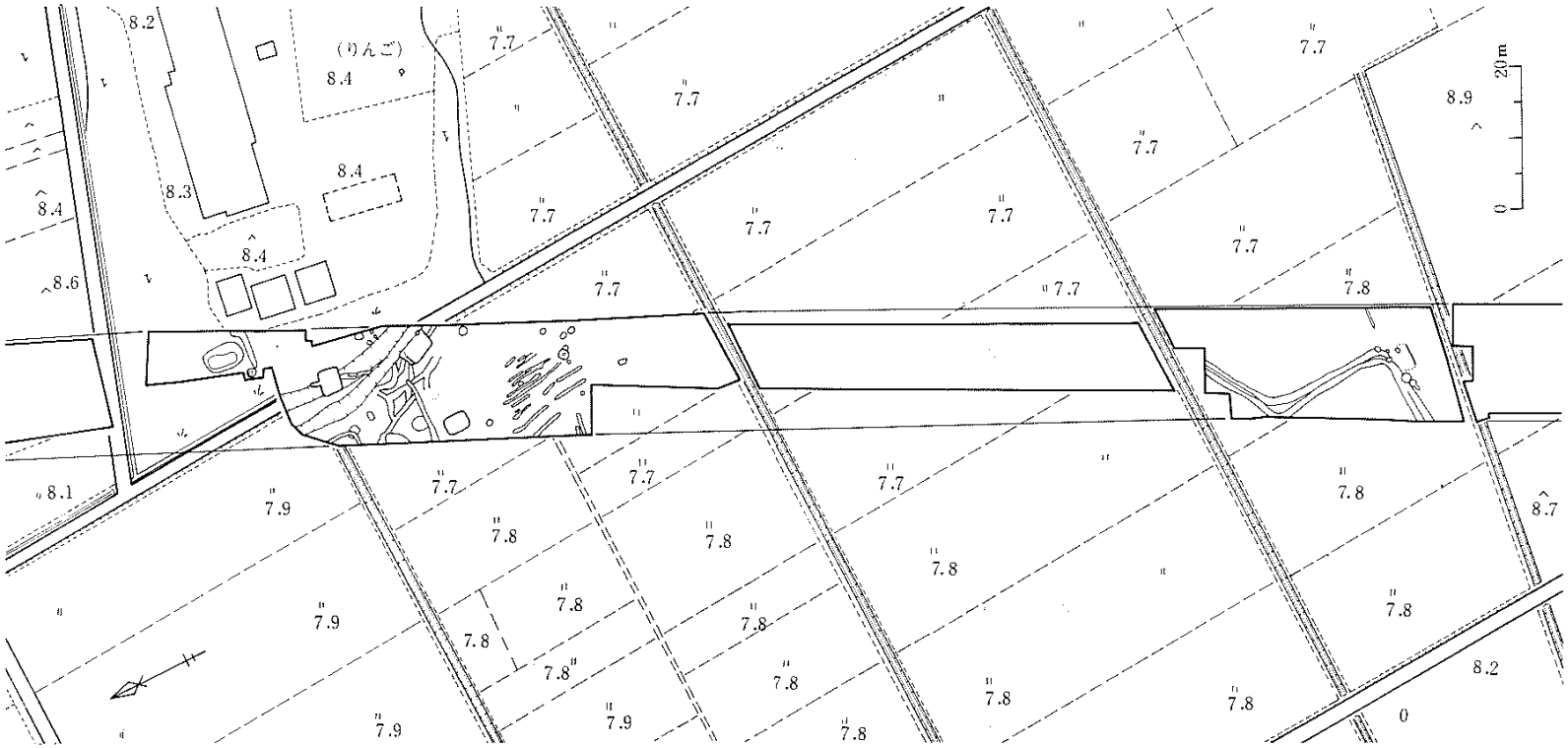
東北新幹線関係遺跡位置図

(1) 清（し）水（みず）　遺　跡

ー第４次調査ー

高橋多吉・佐々木安彦・加藤道男・遊佐五郎
森　貢喜・太田昭夫・手塚　均・熊谷幹男
千葉宗久

遺跡所在地：名取市田高字清水
調 査 期 間：昭和53年８月28日～昭和53年11月27日
調 査 面 積：3200㎡
発 掘 面 積：2300㎡
遺 跡 記 号：BU
遺 跡 番 号：12057
調査協力機関：名取市教育委員会



清水遺跡遺構配置図

１．遺跡の立地

清水遺跡は名取市の市街地から北北西約1.5㎞に位置し、名取川・増田川によって形成された標高約８～９ｍの自然堤防上に立地する。遺跡は東西約１㎞、南北約0.7㎞におよぶ広大な面積をもつ。付近の自然堤防上には、上余田遺跡・田高遺跡など多くの遺跡が分布している。

２．調査の概要

今回の調査は第４次のものである。51年度までに未調査であった水田と宅地の一部を対象とし、発掘区の北側と南側から遺構・遺物包含層などが検出された。基本層序は７層に大別される。３・４・７層は遺物包含層で、遺構は３・４層上面、地山面において検出された。中央部には、水田遺構、灌漑用水路等の存在が予想されたが遺構・遺物などは確認されなかった。

発掘区の北側　竪穴住居跡４軒、焼土遺構３基、井戸跡２基、土壙11基、多数の溝、遺物包含層などが検出された。〈竪穴住居跡〉平面形は一辺が約2.5～４ｍの方形を基調としたものである。奈良時代のもの１軒、他は時期不明である。〈焼土遺構〉平面形が方形のもの、円形のものが検出された。規模は長軸が、0.8～1.2m である。壁面、底面とも火熱を受け赤変している。〈井戸跡〉曲物の井戸粋を伴うもの、素掘りのものがある。前者は掘り方の平面形が円形で直径1.6m、深さ1.2m、断面形は逆台形である。〈土壙〉平面形が円形・方形のものがある。規模・深さ・断面形とも多様である。〈溝〉緩い斜面の部分から幅約２ｍ の大溝が２本、やや南側に幅0.5～１ｍの溝12本、その南側に20～40㎝の溝が約20本検出された。これらの溝は形態上の相違から異った性格のものと推定される。大溝からは多量の遺物が出土した。〈遺物包含層〉緩い斜面から南側へのびる。３・４層は古墳時代前期から奈良・平安時代の遺物を、７層は古墳時代前期（塩釜式期）の遺物を含む。遺物の保存状態は良好である。

発掘区の南側　竪穴住居跡１軒、井戸跡１基、溝、遺物包含層などが検出された。〈竪穴住居跡〉削平が著しく、時期、平面形、規模とも不明である。一部に床面、掘り方が残存していた。〈井戸跡〉平面形は直径1.3ｍの円形で、深さ1.1m、素掘りのものである。溝より新しい。〈溝〉互いに隣接し上端部で重複している。巾は20～80㎝、北側にいくに従い浅くなる。〈遺物包含層〉３層から奈良・平安時代の土師器が出土した。北側に比べ出土量は少い。

出土遺物　遺構、遺物包含層から土師器の坏・甕・高坏、須恵器の坏・壷・瓶・平瓶等が出土した。大溝、遺物包含層からの出土量が多い。これらの年代は、古墳時代前期から奈良・平安時代のものである。この他、磨製石斧１点、弥生土器数点が出土した。

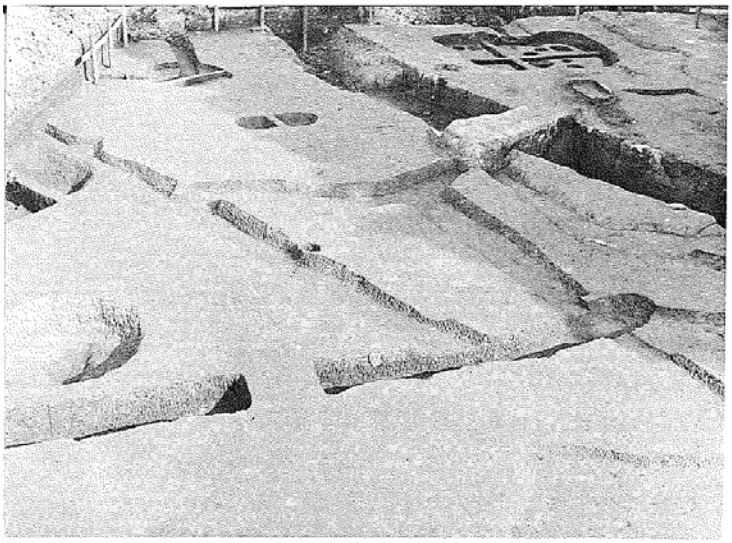
３．まとめ

１．これまでの調査から合計約90軒の竪穴住居跡が検出され、古墳時代前期から奈良・平安時代にわたる大規模な集落跡であることが明らかとなった。

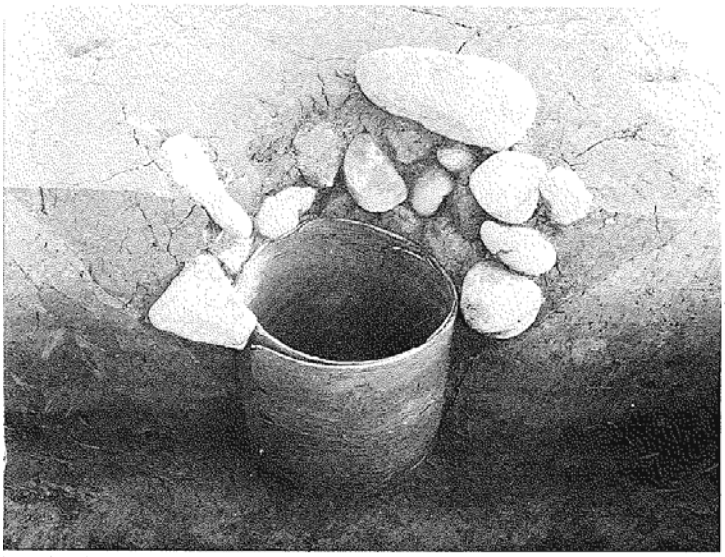
２．今回の調査で良好な遺物包含層が検出され、発掘区域外にも広がるものと推定される。

（熊谷幹男）

参考文献　宮城県教育委員会「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書第40集・宮城県文化財発掘調査略報（49年度分）』
宮城県教育委貞会「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書第42集・宮城県文化財発掘調査略報（50年度分）』
宮城県教育委員会「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書第98集・宮城県文化財発掘調査略報（51年度分）』



清水遺跡発掘区の北側
（南側から）



井戸跡（西側から）

発掘区の南側
（東側から）

(2)　上古川（延命地蔵）遺跡

かみふるかわ　えんめいじぞう

佐々木安彦・千葉宗久・手塚　均・熊谷幹男

遺跡所在地：仙台市中田町字上古川

調 査 期 間：昭和53年11月20日～昭和53年12月11日

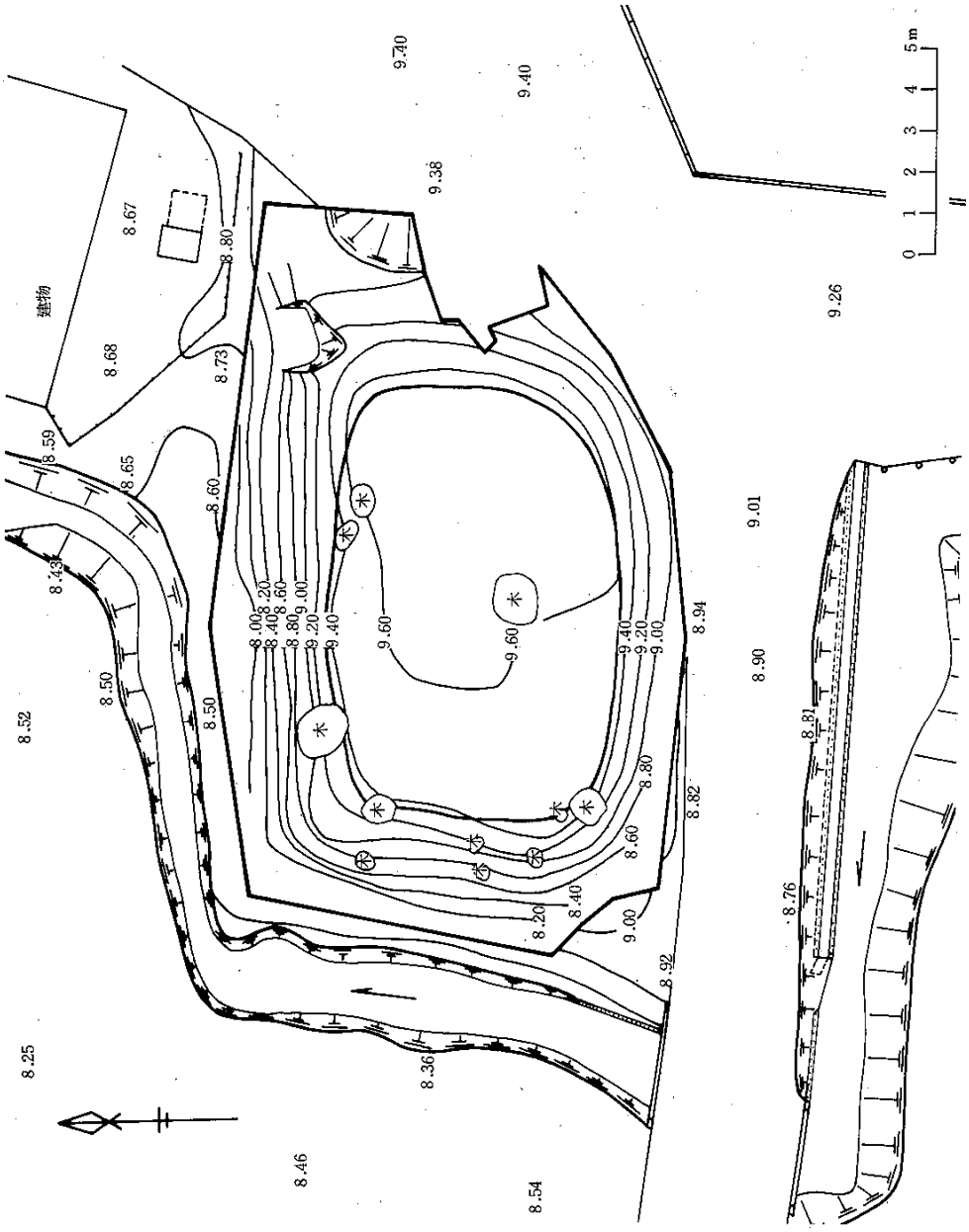
調 査 面 積：700㎡

発 掘 面 積：196㎡

遺 跡 記 号：ＦＪ

遺 跡 番 号：10291

調査協力機関：仙台市教育委員会


建物
8.67
8.68
8.80
8.73
8.59
8.65
8.60
8.43
8.50
8.50
8.52
8.25
8.46
8.36
8.54
8.20
8.40
8.60
8.80
9.00
9.20
9.40
9.60
9.60
9.40
9.20
9.00
8.80
8.60
8.40
8.20
9.00
8.92
8.82
8.94
9.40
9.38
9.40
9.26
9.01
8.90
8.81
8.76
0 1 2 3 4 5m

上古川(延命地蔵)遺跡

１．遺跡の立地

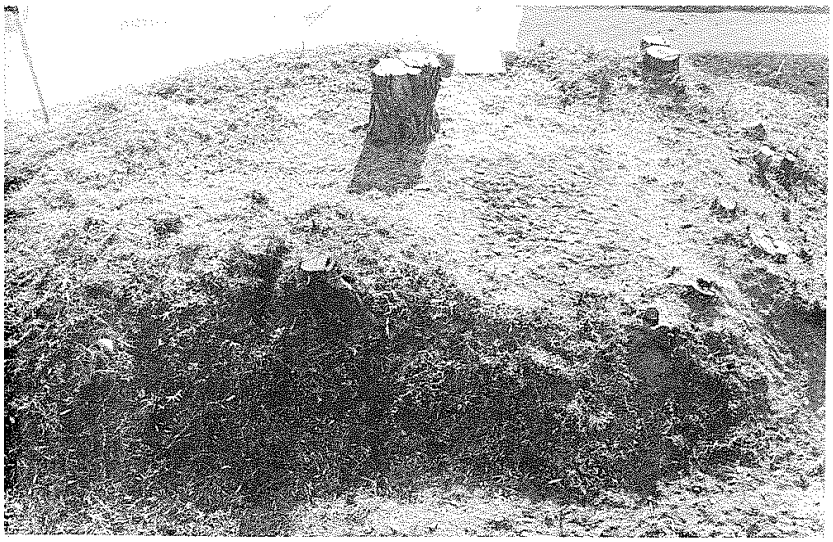
上古川遺跡は仙台市の南部国鉄南仙台駅から北北西約500mに位置し、名取川の形成する標高約８mの沖積地に立地する。遺構は東西16.7m・南北10m、高さ1.2mの高塚古墳であると考えられていた。付近には安久諏訪古墳・伊豆野権現古墳などがあり、名取川の対岸大野田地区からは、五反田古墳・春日社古墳・鳥居塚古墳などが新たに発見されている。

２．調査の概要

遺構は高塚古墳であるとの前提から、墳丘部に十字ベルトを残し調査を開始した。調査の結果、東西16m、南北11m、高さ1.6mの盛土遺構であることが明らかになったが、古墳に伴う内部施設、外表施設などは確認されなかった。遺物は表土から享保の年号をもつ地蔵尊１体、無記銘の地蔵尊２体、明治初年の年号をもつ馬頭観音像２体、盛土の中から寛永通宝数枚、灯明皿10数枚が出土した。

３．まとめ

遺構は当初高塚古墳であると考えられていたが、盛土の中から寛永通宝、灯明皿などが出土したことによって、近世以降に造られた盛土遺構であると考えられる。その性格については、今後詳細な検討が必要である。　　（熊谷幹男）



上古川(延命地蔵)遺跡
発掘前（北側から）

発掘途中（北側から）

発掘終了（北側から）

Ⅲ　一般開発関係遺跡

(1) 市川橋（いちかわばし）、山王（さんのう）遺跡

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 40
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 42
Ⅲ．調査の経過 …… 42
Ⅳ．調査の成果 …… 46
　１．発見遺構 …… 46
　２．出土遺物 …… 47
　３．出土遺物の年代 …… 55
　Ⅴ．まとめ …… 55

例　　言

１．本書は宮城県教育庁文化財保護課が担当して調査を行なった宮城県多賀城市山王・市川所在遺跡の調査報告書である。

２．発掘調査は株式会社阿部大の協力を得て昭和53年３月・11月・12月の３回に分けて行ない整理作業は宮城県教育庁文化財保護課上愛子遺物収納所において同年12月に実施した。

　発掘調査員　佐々木茂楨・丹羽　茂・加藤道男・真山　悟・森　貢喜・千葉宗久

３．本書の作成にあたっては東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所の協力を得た。

４．本書の執筆、編集は文化財保護課職員の協議を得て加藤道男・森　貢喜が行なった。

Ⅰ．調査に至る経過

仙台市を中心とする仙塩地区は、県下で最も都市化の進んでいる地域であり、このため家庭や工場からの排水量が増大し、七北田川・砂押川をはじめ松島湾の水質の汚濁が進んで生活環境の悪化が心配されている。

宮城県土木部が行う仙塩流域下水道事業は、このような環境を改善し、河川や海に清流を取りもどすために、昭和47年度から建設が進められているものである。

すなわち、松島湾の一部を含む七北田川左岸および砂押川の流域を対象とし、仙台市・塩釜市・多賀城市・泉市・利府町・七ヶ浜町の４市２町にわたる広域的な下水道計画である。

そのうち県は、関連市町の公共下水道に接流する幹線管渠と終末処理場を流域下水道として整備するものであり、昭和52年秋には七北田川左岸幹線管渠布設工事計画が具体化し、53年度の完成がはかられた。

宮城県教育委員会では、昭和52年11月以降再三にわたって文化財の取扱いを土木部と協議した。その結果、砂押川をはさんで多賀城市から利府町にかけての延長3420m程の幹線管渠布設工事区間内に埋蔵文化財との係り合いが推察された。

そのため、52年12月に埋蔵文化財の分布調査を、53年３月には遺構確認調査を実施して事業と遺跡との係り合う部分を特定し具体的なデータを得た。

この結果をもとに土木部では、工期等のかね合いから遺跡の係る箇所を含む多賀城市高崎ー南宮間2150mの区間は推進工法による施工を採用することに決めるとともに、立壙位置だけの発掘調査を依頼してきた。

こうして、昭和53年３月４日～10日に第一次調査で１ヵ所、53年11月27日～11月29日の第二次調査で10ヵ所、53年12月13日～14日の第三次調査で１ヵ所、合計12ヵ所の立壙箇所の発掘調査を実施した。

調査要項

遺跡名：山王遺跡、市川橋遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：18013．18008）

遺跡記号：ＥＳ（第１回調査分）

　　ＦＩ（第２・３回調査分）

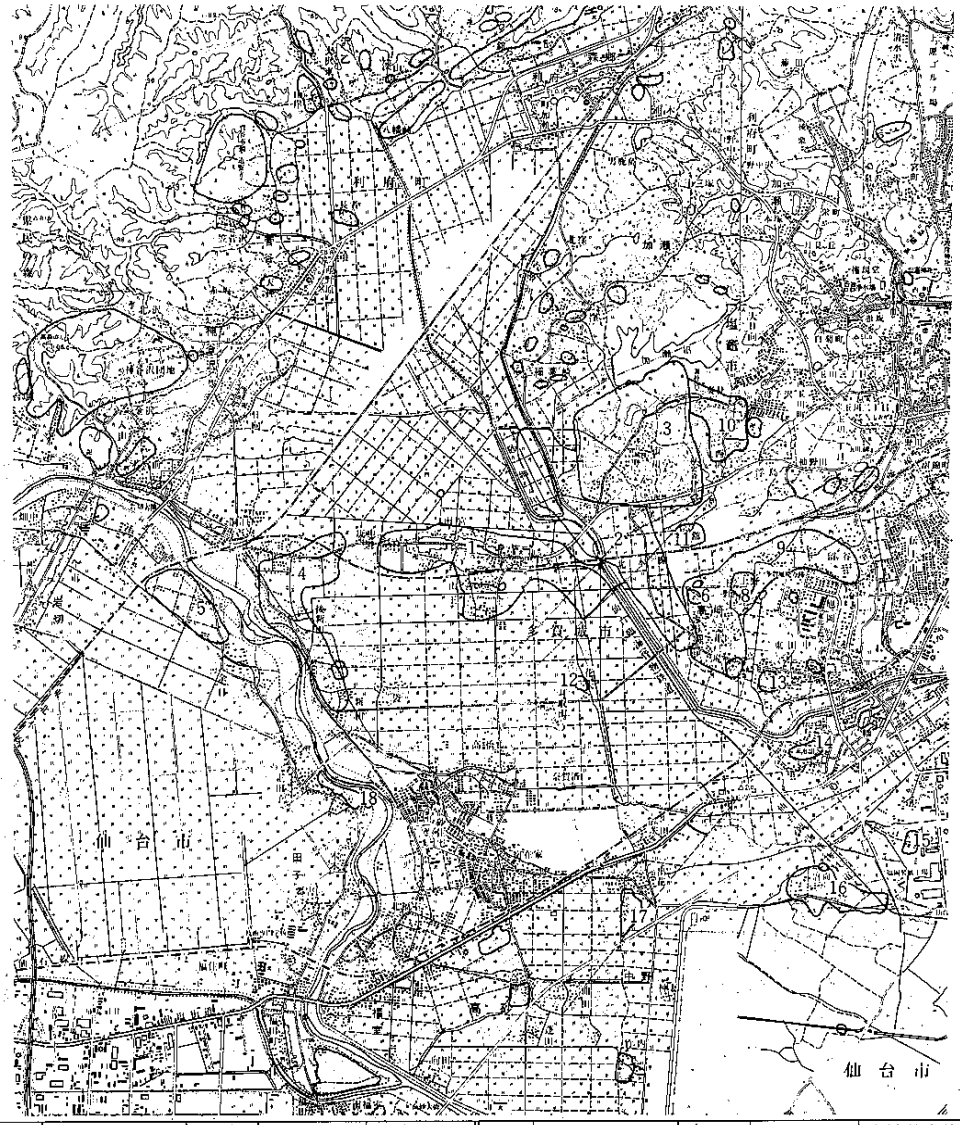
所在地：宮城県多賀城市山王・市川

調査対象面積：約670㎡（発掘面積約274㎡）

調査主体者：宮城県教育委員会・宮城県土木部

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：第１回　昭和53年３月６日～11日、第２回　11月27～29日、第３回　12月13～14日



番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号	番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号
1	山王遺跡	包含地	古墳 奈良・平安	18013	10	西沢遺跡	包含地	奈良・平安	18017
2	市川橋遺跡	包含地	縄文・弥生・古墳 奈良・平安	18008	11	館前遺跡	包含地 城館	奈良・平安 中世	18022
3	多賀城跡	国府跡	奈良・平安	18006	12	大日北遺跡	包含地	奈良・平安	18015
4	新田遺跡	包含地	古墳 奈良・平安	18012	13	志引遺跡	包含地 城館	奈良・平安 鎌倉	18020
5	岩切鴻ノ巣遺跡	包含地	古墳 奈良・平安	01034	14	古館遺跡	包含地 城館	奈良・平安 中世	18021
6	高崎古墳群	円墳	古墳(中・後)	18002	15	沖ノ井八幡神社遺跡	集落跡	平安	18007
7	高森城跡	城館	中世	01026 22055	16	沼向遺跡	包含地	奈良・平安	01151
8	高崎廃寺跡	寺院跡	奈良・平安	18005	17	出花遺跡	包含地	奈良・平安	01149
9	高崎遺跡	古墳群	奈良・平安 南北朝	18018	18	堰下遺跡	包含地	平安	01296

第1図　周辺の遺跡

Ⅱ．遺跡の位置と環境

今回の調査には、山王遺跡と市川橋遺跡との２遺跡が係わっている。山王遺跡は多賀城市山王に所在し、東北本線山王駅の北西約300mの地点にあたる。市川橋遺跡は同市市川に所在し、山王遺跡の北方、砂押川の対岸に位置している。

両遺跡周辺は広義の仙台平野（沖積低地）の北東端にあたり、西方には七北田川・砂押川が源を発する富谷丘陵がせまり、北方は松島丘陵と接し、東方は太平洋に面している。

山王、市川遺跡はいずれも砂押川によって形成された自然提防上に立地している。山王遺跡は南半がすでに宅地化されており、北半は水田として利用されている。水田での標高は約4.5mである。市川橋遺跡は現状がほとんど水田で、標高は３～４mである。

流域下水道の路線は山王遺跡の北端を町並に沿って東に向かい、砂押川を越えて南下し、高崎地区で東方に折れる。

周辺の遺跡をみてみると古墳時代の遺跡として、山王遺跡の南東方約200mの七北田川の自然堤防上に新田遺跡があり、その対岸には岩切鴻ノ巣遺跡が所在している。また、東側の丘陵地帯に高崎古墳群などがみられる。奈良時代に入ると、東北地方にも律令体制がしかれ、陸奥国の国府である多賀城が市川橋遺跡と近接した東側の丘陸上につくられ、付近の丘陵上や沖積平野にはその時代の遺物を出土する遺跡が多くなってくる。山王遺跡、市川橋遺跡もその中のひとつである。中世の遺跡としては、北西の丘陵上に留守氏の拠城である高森城があり、また、七北田川流城の遺跡から中世陶器が多く出土している。

Ⅲ．調査の経過

今回の調査は、山王遺跡と市川橋遺跡にかかる流域下水道の竪坑12ヶ所（№.１～№.12）を対象としている。対象面積は合計約670㎡である。

調査は３回に分けて実施した。

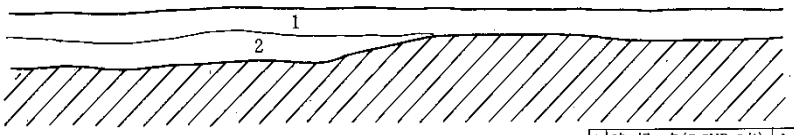
第１回の調査は昭和53年３月６日～11日の６日間に行った。対象となった竪坑は№.12である。砂押川の左岸、市川橋の南約900mの水田に位置しており、市川橋遺跡内に含まれる。基本層位は、第１層表土（水田耕土）第２層暗褐色シルト層、第３層褐色砂で、地山は砂層である。第３層上面で溝２本などが検出された。遺物は第１～３層遺構内から出土している。発掘面積は約110㎡である。

第２回の調査は11月27日～29日の３日間に行った。市川橋をはさんで砂押川の両岸に位置する竪坑11ヶ所（№.１～№.11）を対象とした。№.１～№.３竪坑は市川橋遺跡内に、№.４～№.11竪坑は山王遺跡内に含まれる。なお、№.４竪坑は調査期間内に土地買収が終了せず、また№.７

No.1
No.2
No.3
No.4
No.5
No.6
No.7
No.8
No.9
No.10
No.11
No.12
南宮
東北本線
砂押川
県道根白石・塩釜線
市川橋
高崎
化度寺
0
500m

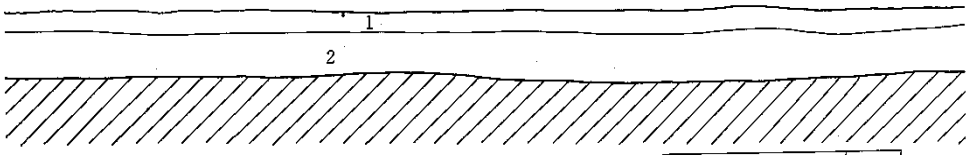
第2図　調査区位置図

No. 1 竪坑東壁



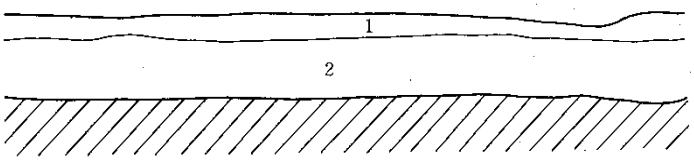
1	暗 褐 色(7.5YR 3/4)	シルト
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト

No. 2 竪坑東壁



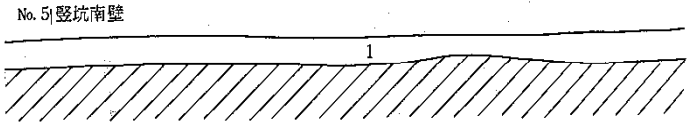
1	暗 褐 色(7.5YR 3/4)	シルト
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト

No. 3 竪坑東壁



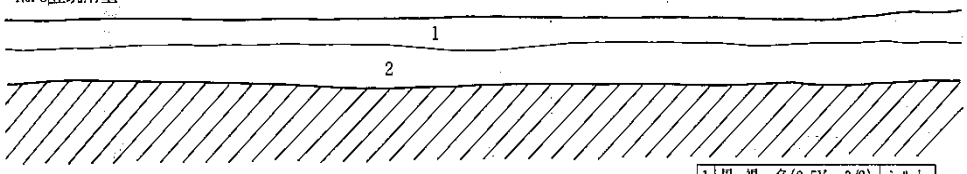
1	暗 褐 色(7.5YR 3/4)	シルト
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト

No. 5 竪坑南壁



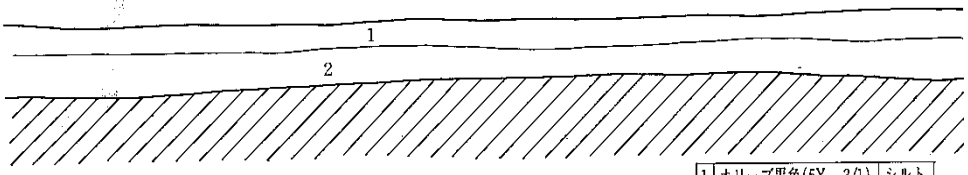
1	オリーブ黒色(5Y 3/1)	シルト

No. 6 竪坑南壁



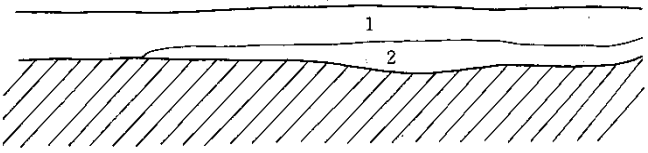
1	黒 褐 色(2.5Y 3/2)	シルト
2	黒 褐 色(10YR 2/3)	シルト

No. 8 竪坑南壁



1	オリーブ黒色(5Y 3/1)	シルト
2	灰 色(5Y 4/1)	シルト

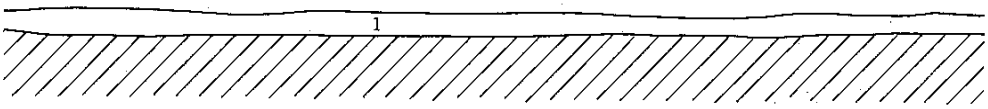
No. 9 竪坑南壁



1	オリーブ黒色(5Y 3/1)	シルト
2	灰 色(5Y 4/1)	シルト

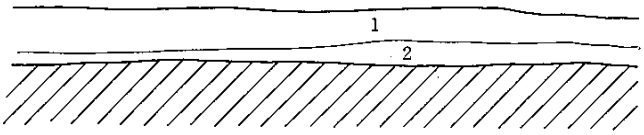
第 3 図　竪坑断面図

No.10竪坑南壁

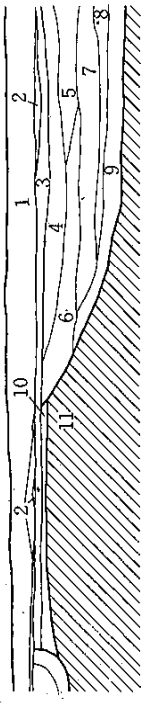


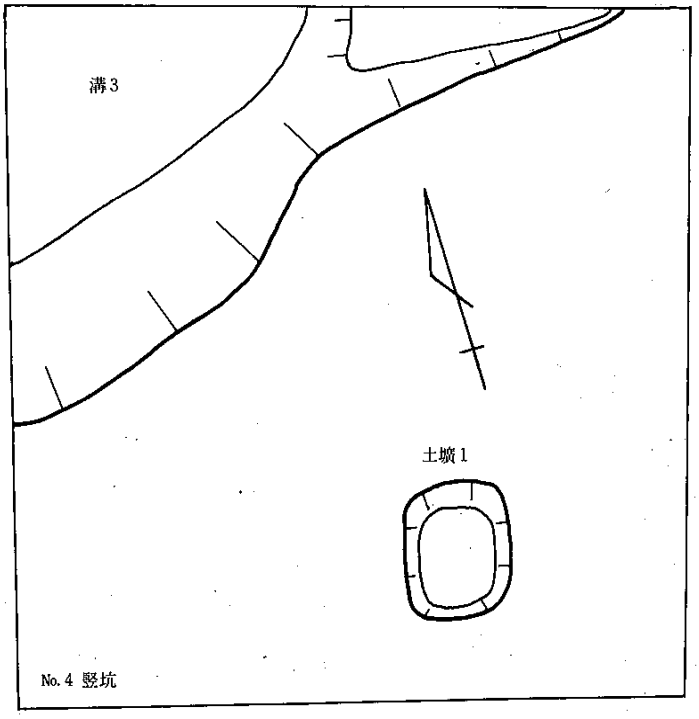
1	黒　褐　色(2.5Y　2/1)	シルト

No.11竪坑南壁



1	黒　褐　色(2.5Y　2/1)	シルト
2	オリーブ褐色(2.5Y　4/3)	粘土質シルト





層No.	層位	土　　色	土　性	その他
1	第1層			水田耕土
2	第2層	灰　黄　色 (2.5Y　9/2)	中　　砂	第2層
3	第3層	黒　褐　色 (10YR 3/2)	砂質シルト	第3層
10	第4層	暗　褐　色 (10YR 3/3)	シルト質砂	第4層
11		にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	中　　砂	地　山

第3溝内堆積土

層No.	土　　色	土　性
4	暗　褐　色 (10YR 3/3)	シルト質砂
5	褐　　色 (10YR 4/4)	シルト質砂
6	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト質砂
7	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	中　　砂
8	褐　灰　色 (10YR 4/1)	粘土質砂
9	褐　灰　色 (10YR 5/1)	シルト質砂

第4図　竪坑平面図・断面図

竪坑は多賀城第二中学校の排水路内に位置していたため調査しなかった。

№.４・７竪坑以外の竪坑はいずれも水田と農道・水路にまたがっている。そのため、まず水田部分の調査を行った。基本層位は、№.５・10 竪坑では第１表土（耕土）のみであり、他の竪坑では第１表土（耕土）第２層黒褐色・灰色のシルト層で、地山は砂層である。

遺構は検出されず、遺物も第１・２層から少量出土しただけなので、水路・農道部分の拡張は行わなかった。発掘面積は約 65 ㎡である。

第３回の調査は12 月13・14 日の２日間に行った。前回行えなかった№.４竪坑を対象とした。現状は水田である。基本層位は第１層表土（耕土）第２層灰黄色砂層、第３層黒褐色シルト層、第４層暗褐色砂層で、地山は砂層である。第４層上面で溝が１本、地山面で土壙が１基検出された。遺物は第１～４層、遺構内から出土しており、第３・４層、溝内に多い。発掘面積は約 54 ㎡である。

以上、３回の調査で竪坑11 ヶ所、合計約 274 ㎡を発掘した。発見遺構は溝３本、土壙１基である。出土遺物は土師器、須恵器、瓦が多く、他に№.４竪坑では硯・紡錘車・砥石が、№.12 竪坑では木材・自然木が出土している。

Ⅳ．調査の成果

１　発見遺構

遺構は№.12 竪坑で溝２本（第１・第２溝）と土壙状の落ち込みが、№.４竪坑で溝１本（第３溝）と土壙１基が検出された。

第１溝－№.12 竪坑の第３層上面で確認された。幅約２m、深さ約１m で、断面形は上に開いた「U」字形をなしている。堆積土は暗灰褐色の粘土質シルトである。遺物は壁面、底面と堆積土から土師器・須恵器が少量出土している。

第２溝－№.12 竪坑の第３層上面で確認された。幅は６～９m、深さ約 1.5m で、断面形は幅の広い「U」字形をなしている。堆積土は全体に暗灰褐色の粘土質シルトであるが、底面近くでは粗砂の薄い層をはさんでいる。遺物は堆積土から土師器・須恵器・瓦などが出土している。

第３溝－№.４竪坑の第４層上面で確認された。一方の壁しか検出されておらず幅は不明で、深さは約 50cm である。堆積土から土師器・須恵器・瓦などが多量に出土している。

また第１溝と第２溝との間に土壙状の落ち込みが１基検出された。確認面は第３層上面であり、第１・２溝と重複する位置にあるが新旧関係は確認できなかった。底面から木材が出土した。

第１土壙－№.４竪坑の地山上面で確認された。平面形は約120×90cm の楕円形で、深さは約20cm である。堆積土から土師器・須恵器がごく少量出土している。

これらの遺構は、いずれも調査区が狭いこともあって性格を明らかにすることはできなかった。また、遺構に伴う遺物は第１溝から時期の不明な土師器・須恵器の小破片が出土しているのみであり、遺構の年代も不明である。堆積土からは古墳時代後半から平安時代までの遺物が出土している。

２　出土遺物

出土した遺物には土師器・須恵器・瓦・硯・紡錘車などがある。各竪坑出土のものを一括して扱う。

土師器

坏・甕・高台付坏・蓋・高坏・甑・小形壺がある。このうち、坏と甕のほかは図示できたものがおのおの１点ずつである。

〈坏〉

坏には、製作に際しロクロを使用しないものと、使用しているものとがあり、それぞれ器形や製作技法の特徴によって再分される。

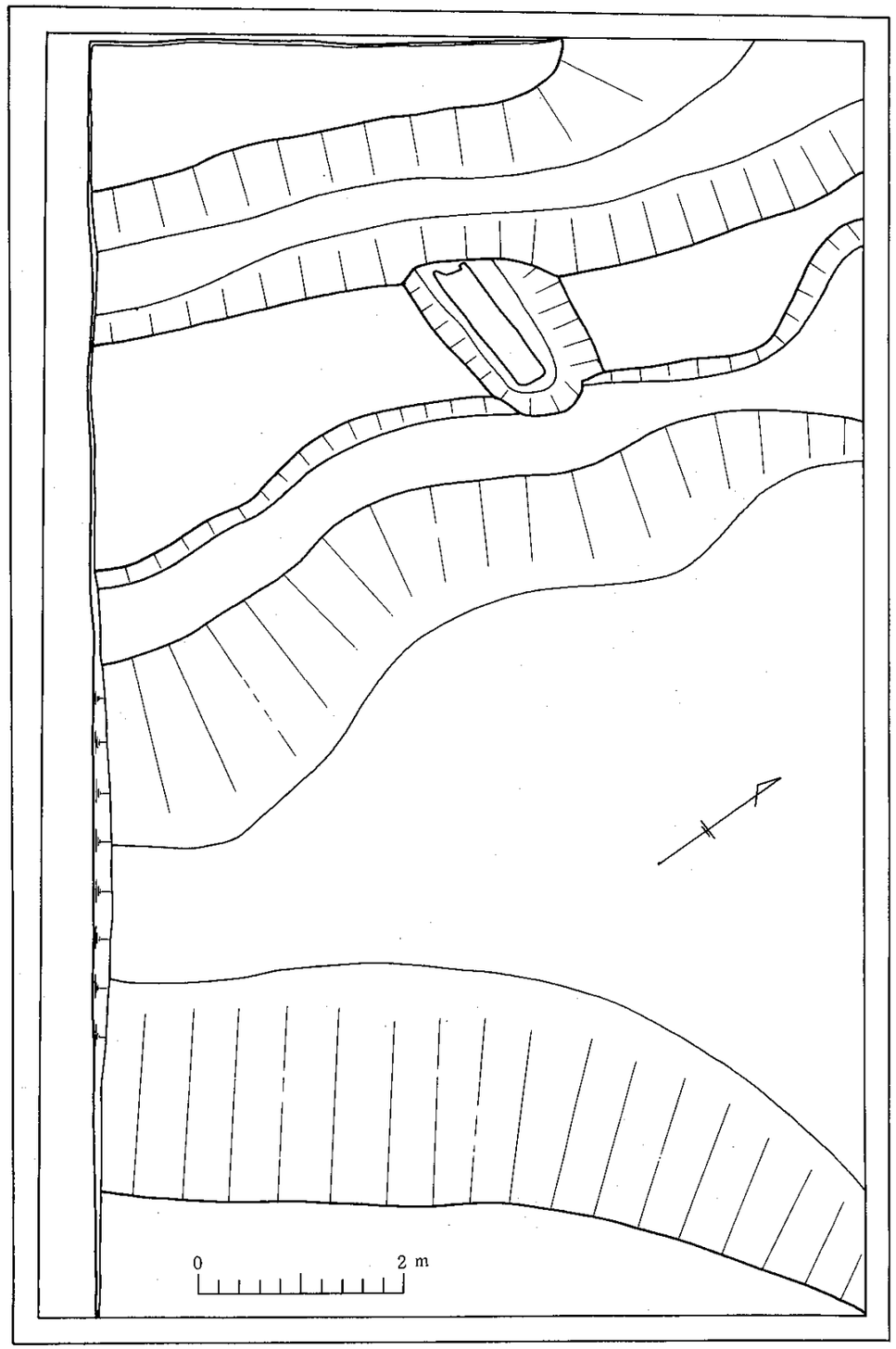
坏A類ー製作にロクロを使用していないものである。いずれも丸底で内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。体部の段の有無によって３つに細分される。ＡⅠ類は体部の内外面に段がつくもの（１・２）であり、段から上は外傾する。外面の段から上に横ナデ、段から下にヘラケズリが施されている。ＡⅡ類は体部外面にのみ段がつくもの（３・４）で、段から上は外傾する外面の段から上に横ナデ、段から下にヘラミガキが施されている。ＡⅢ類は内外面いずれにも段がみられず、体部から口縁部まで全体に丸味をもって外傾する（5）。

坏B類ー製作にはロクロを使用しているものである。いずれも外面にロクロ調整痕を残し、内面はヘラミガキ・黒色処理が加えられている。底部の切り離し方法によって２つに細分される。ＡⅠ類は底部が回転糸切り技法によって切り離されているもの（６・７）であり、外面に再調整はみられない。ＡⅡ類は再調整が加えられて底部の切り離し方法が不明なものである。再調整は体部下端から底部にかけて加えられており、ａ・手持ちのヘラケズリ（８）と、ｂ・回転ヘラケズリ（９）がみられる。

〈甕〉

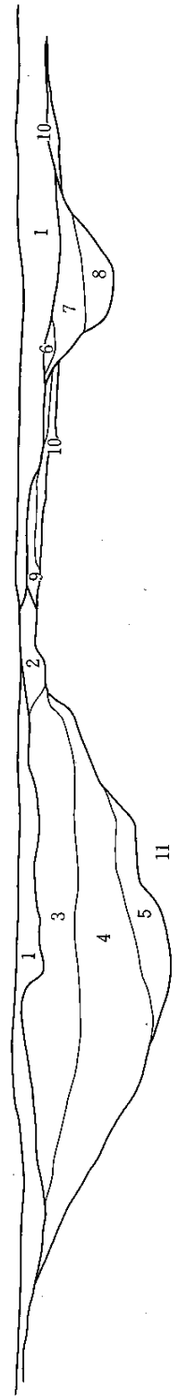
甕には製作に際してロクロを使用していないものと、ロクロを使用しているものとがあり、前者は口径と器高の比較によって細分される。

甕A類ー製作にロクロを使用しないものである。ＡⅠ類は口径より器高が大きく、いわゆる長胴形のものであり、最大径の位置が、ａ・口縁部にあるもの（10・12）ｂ・体部にあるもの（13）とに分かれる。口縁部は外反し、先端が丸くおさまっている。頚部に段のつくものもあり、体部は直線的なものと丸味をもつものとがある。器面調整は、口縁部に内外面とも横ナデ、

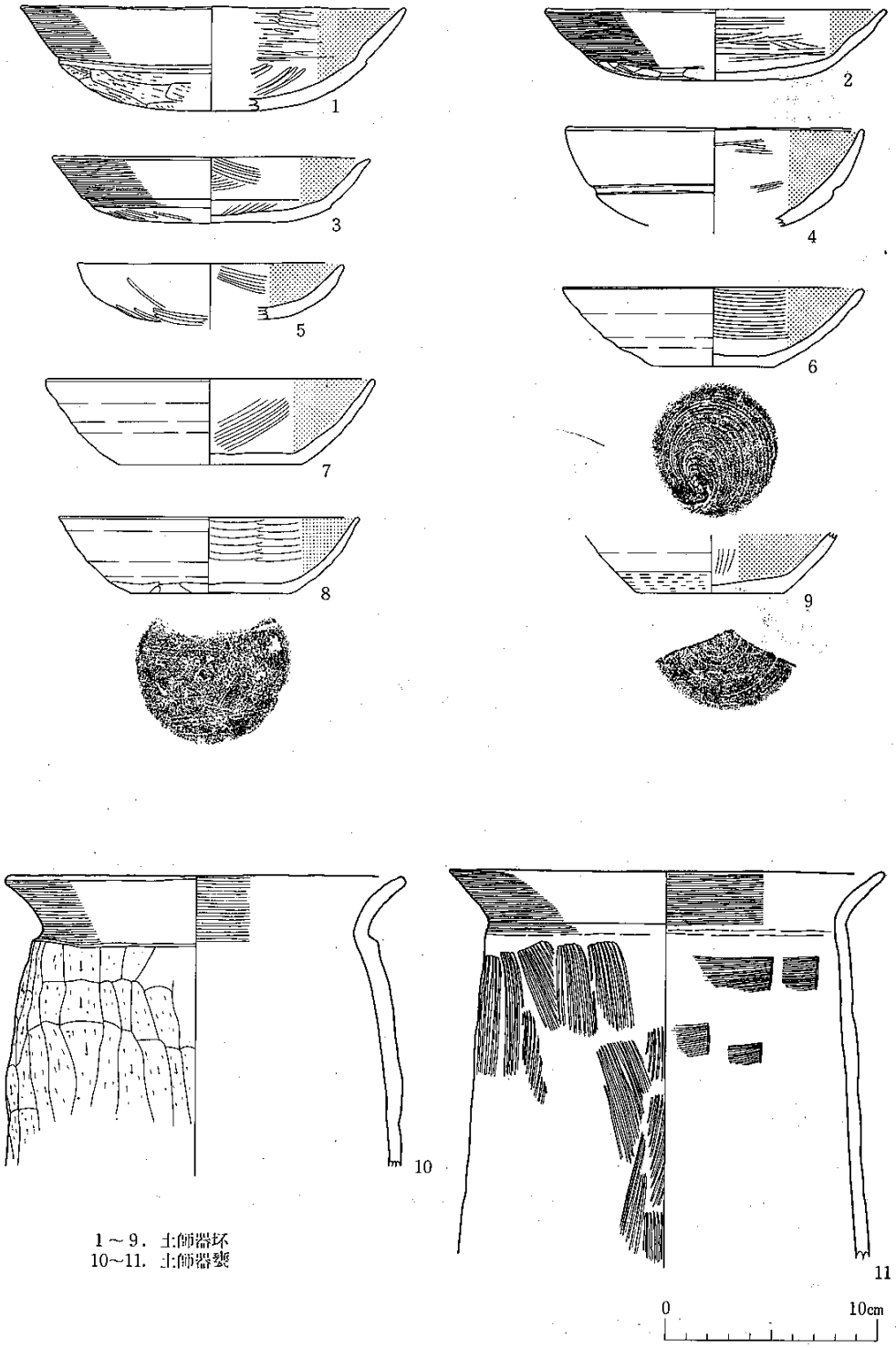


層No.	層位	色調			
1	第2層	黒褐色	10YR 2/3	シルト	
2	第2堆積土	明赤褐色	5YR 5/8	砂	酸化鉄，砂質ブロックを含む
3		灰・黄褐色	10YR 4/2	シルト	酸化鉄の粒を多く含む
4		灰色	7.5Y 4/1	〃	粘土粒を含む
5		灰色	〃	〃	

層No.	層位	色調			
6	第1堆積土	暗灰黄色	2.5Y 5/2	砂	酸化鉄粒を多く含む
7		黒褐色	2.5Y 3/2	シルト	
8		オリーブ黒色	7.5Y 3/1	〃	炭化物粒を含む
9	第3層	にぶい黄褐色	10YR 5/4	砂	酸化鉄ブロックを多く含む
10	第4層	黒褐色	10YR 3/2	シルト	
11	地山	緑灰色	10GY 5/1	砂	



第5図竪坑平面図断面図　No.12竪坑



1～9．土師器坏
10～11．土師器甕

第6図　出土遺物

体部外面に刷毛目あるいはケズリ、体部内面にナデ・ヘラナデが施されている。

ＡⅡ類は口径が器高より大きいものである。口縁部は外傾し、先端は内側がそれた形となっている。体部は上半が直立し、下半はすぼまる。器面調整は、口縁部に内外面とも横ナデ、体部外面に刷毛目、体部内面にヘラナデが施されている。底部に木葉痕がみられる（14）。

甕Ｂ類ー製作にロクロを使用するものである。口径より器高が大きい、いわゆる長胴形であり、最大径は口縁部にある。口縁部は外傾し先端が上方につまみ出されるものがある。内外面にロクロ調整痕を残すが、外面体部下半にヘラケズリが加えられている。体部はわずかに丸味をもつ（15・16）。

〈高台付坏〉

口縁部を欠いている。高台は短くほぼ直立する。底部に回転糸切り痕を残す。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている（17）。

〈蓋〉

つまみはリング状で、わずかに外傾する。天井部に明瞭な角がつく。角から口縁部まで直線的であり、先端は下方に折り曲がる。器面調整は、ロクロ調整ののち内外面ともていねいなヘラミガキ・黒色処理が施されている（18）。

〈高坏〉

坏部下端と脚部が残存する。脚部は柱状部がごく短く、裾部が大きく開く。器面調整は、坏部の外面にヘラケズリ・内面にヘラミガキ・黒色処理が施され、脚部は内外面に刷毛目がみられる（19）。

〈甑〉

無底式の甑である。口径が器高より大きい鉢形で、口縁部は外反し、体部はわずかに丸味をもつ。器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面に刷毛目ののちヘラケズリ、体部内面にはヘラナデが施されている（20）。

〈小形壺〉

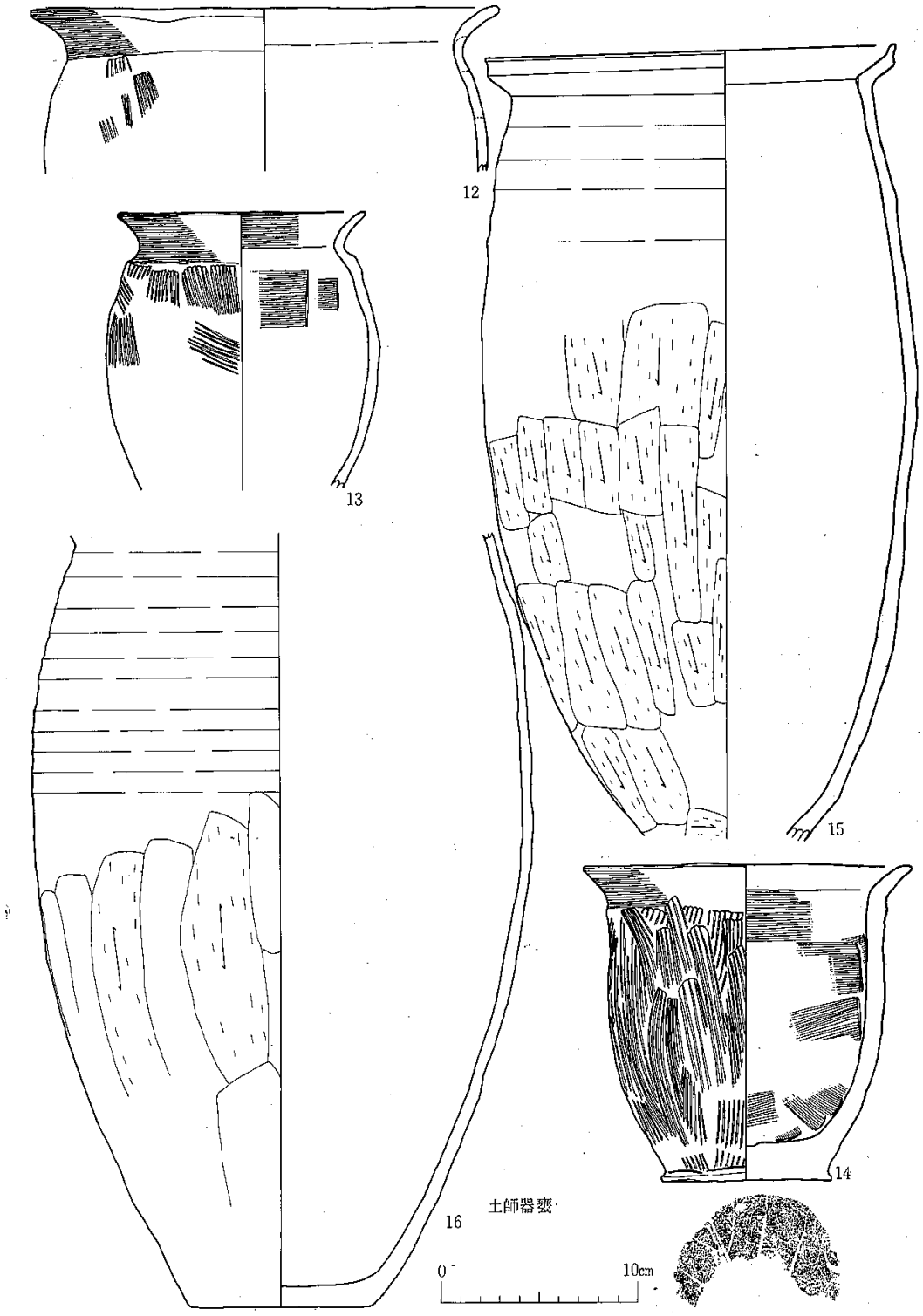
口縁部を欠き、体部はややゆがんだ球形で、底部は平底である。器面調整は外面全体にヘラケズリを施したのち、一部にヘラミガキ、内面にはヘラナデが観察される（21）。

須恵器

坏・高台付坏・蓋・鉢・甕・壺・長頸蓋・瓶がある。このうち高台付坏と蓋・甕はいずれも小破片で図示できるものがない。また、鉢・長頸壺、壺、瓶は図示できたものがおのおの１点ずつである。

〈坏〉

底部の切り離し方法で分類される。



第7図　出土遺物

A類－底部がヘラ切りによって切り離されている。底部に、Ⅰ手持ちヘラケズリが加えられているもの（22）と、Ⅱ再調整のないもの（23）とがある。

B類－底部が回転糸切り技法によって切り離されている。体部は丸味をもって外傾し、口縁部はわずかに外反する。再調整はみられない。

C類－底部に回転ヘラケズリが加えられて切り離し方法の不明なものである。体部は丸味をもって外傾する（25）。

〈鉢〉

口縁部から体部まで直線的に外傾する。底部は平底で横に張り出している。体部中央に２条の沈線がめぐる。底部にヘラケズリが施されている（26）。

〈壺〉

口縁部と底部を欠いている。体部はゆがんだソロバン手形である。器面調整は、内外面ともにロクロ調整痕を残すが、外面体部下半に回転ヘラケズリが加えられている。外面体部上半には自然釉がみられる（27）。

〈長頸壺〉

頸部と口縁部が残存する。口縁部は外反し先端内側が小さく上方につまみ出されている。頸部はわずかに外反する（28）。

〈聰〉

口縁部を欠いている。頸部は直立する。体部はつぶれた球形で、底部は丸底である。体部中央に２条の沈線がめぐり、沈線間に縦位の刻目がならぶ。器面調整は内外ともロクロ調整痕がみられるが、底部には手持ちヘラケズリが加えられている（29）。

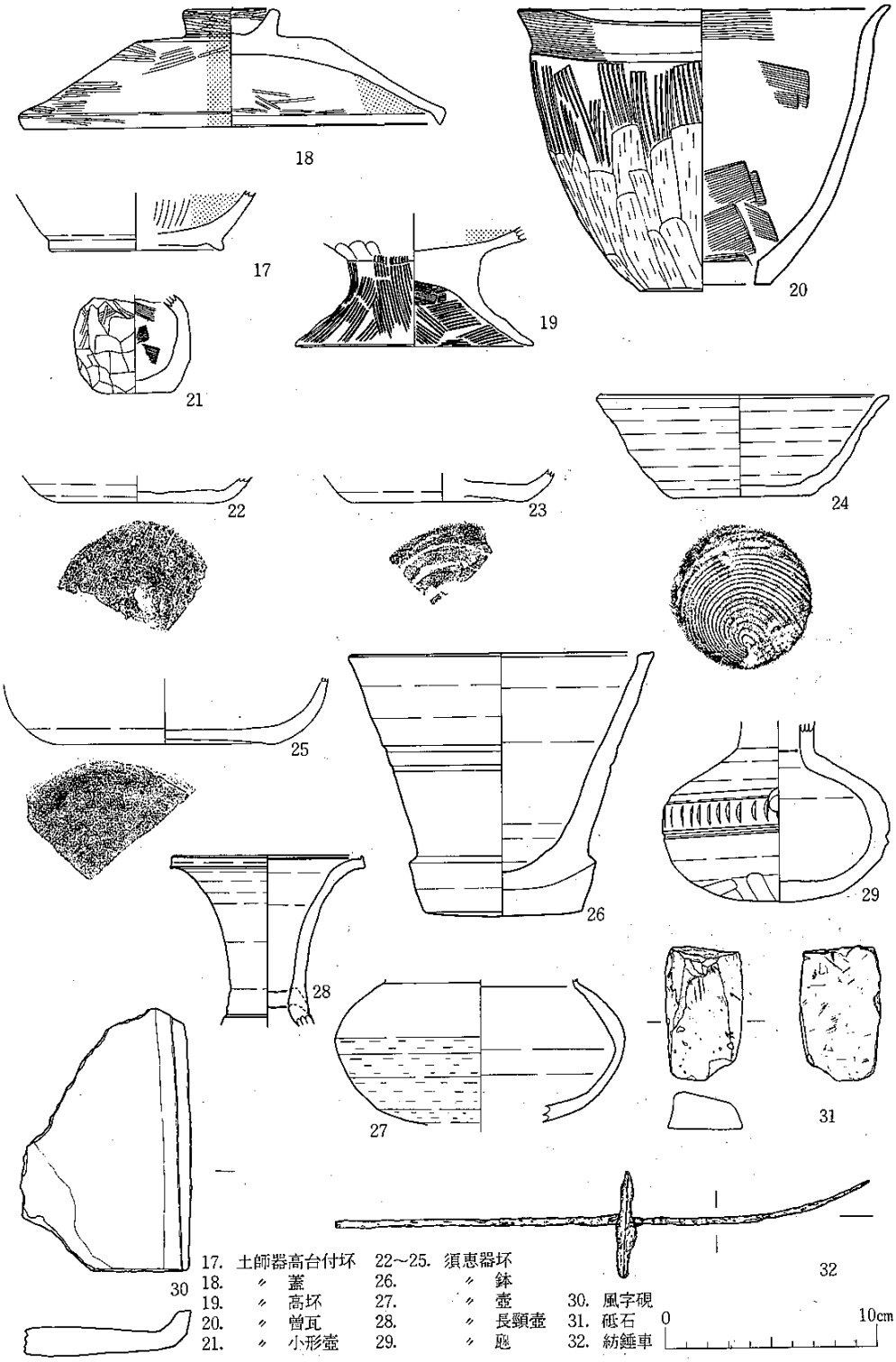
瓦

軒平瓦－破片が１点出土している。均整唐草文軒平瓦である。顎面には縄叩き目を下地として、ヘラ書きの鋸歯文が描かれている。凹面には布目を残している。

丸瓦－玉縁付丸瓦が２点あり、他は小破片で玉縁の有無は不明である。玉縁付丸瓦は粘土紐巻きあげ技法によるものである。凸面は縄叩き目「スリケシ」が加えられており、玉縁部は回転台を利用した「ナデ」が施されている。凹面は布目痕を残している。このほかの小破片では凹凸面とも玉縁付丸瓦と同様の痕跡が観察されるものが多く、他には凸面に「スリケシ」が施され、凹面に布目を残すものがある。

平瓦－いずれも破片である。凸面は縄叩き目を残すものの他に「スリケシ」の調整が加えられているものがある。内面は布目を残すものと「スリケシ」の施されているものとがある。

硯－陶硯が１点出土している。風字硯の半欠品である。陵はよく磨滅し、外側をめぐる海との境は明瞭でない。海は外堤に向かって傾斜する。外堤は上端が角ばっている。



17. 土師器高台付坏　22～25. 須恵器坏
18. 〃 蓋　26. 〃 鉢
19. 〃 高坏　27. 〃 壺　30. 風字硯
20. 〃 甑瓦　28. 〃 長頸壺　31. 砥石
21. 〃 小形壺　29. 〃 甕　32. 紡錘車

第 8図　出土遺物

紡錘車－鉄製のほぼ完形品が１点出土している。直径５㎝、厚さ３㎜ の円盤形をし、中央部に軸を通している。軸は断面形が径３㎜ので、長さは25.5㎝で一方は弯曲している。円盤と軸を固定するための留金などはみられない（32）。

砥石－泥岩製の半欠品が１点出土している。現存長 62㎝、幅 3.5㎝ の短円形をし、磨面は４面にあり、いずれの磨面にも擦痕が認められる（31）。

なお、遺物としてはこれらのほかに№12 竪坑から木材・自然木が出土しているが、非常にもろく原形をとどめているものがないため省略した。

３　遺物の年代

遺物は実測図の作製できたものが少なく、また、共伴関係を指摘しうる出土状態のものはない。そのため、所属時期については、個々の特徴によって大まかな検討を加えるにとどめる。

土師器は、坏ＡⅠ類・高坏が栗遺跡などに、坏ＡⅡ・ＡⅢ類が糠塚遺跡などに類例がみられてそれぞれ栗図式・国分寺下層式とされている。坏Ｂ類、甕Ｂ類、蓋、高台付坏はいずれも製作にロクロを使用しており、表杉ノ入式と考えられる。甕Ａ類については、栗囲式から表杉ノ入式までの各型式に属する類例があり、時期を限定できない。

須恵器の坏は集落遺跡における土師器との共伴関係をみると、ヘラ切り（Ａ類）と回転ヘラケズリ再調整（Ｃ類）のものは国分寺下層式に、回転糸切り（Ｂ類）のものは表杉ノ入式に共伴していることが多い。

瓦は均整唐草文軒平瓦が陸奥国府多賀城の第Ⅲ期のものであり、他は奈良・平安時代のものと思われる。

これら以外の遺物については、類例が少く時期は不明であるが、上記の所属時期が判明するものは土師器の編年における栗囲式期から表杉ノ入式期－実年代は大まかに古墳時代後期から平安時代－に含まれており、これらもその年代幅の中におさまるものと思われる。

（注）宮城県多賀城跡研究所の御教示によれば瓦の分類番号 721Ａとのことである。

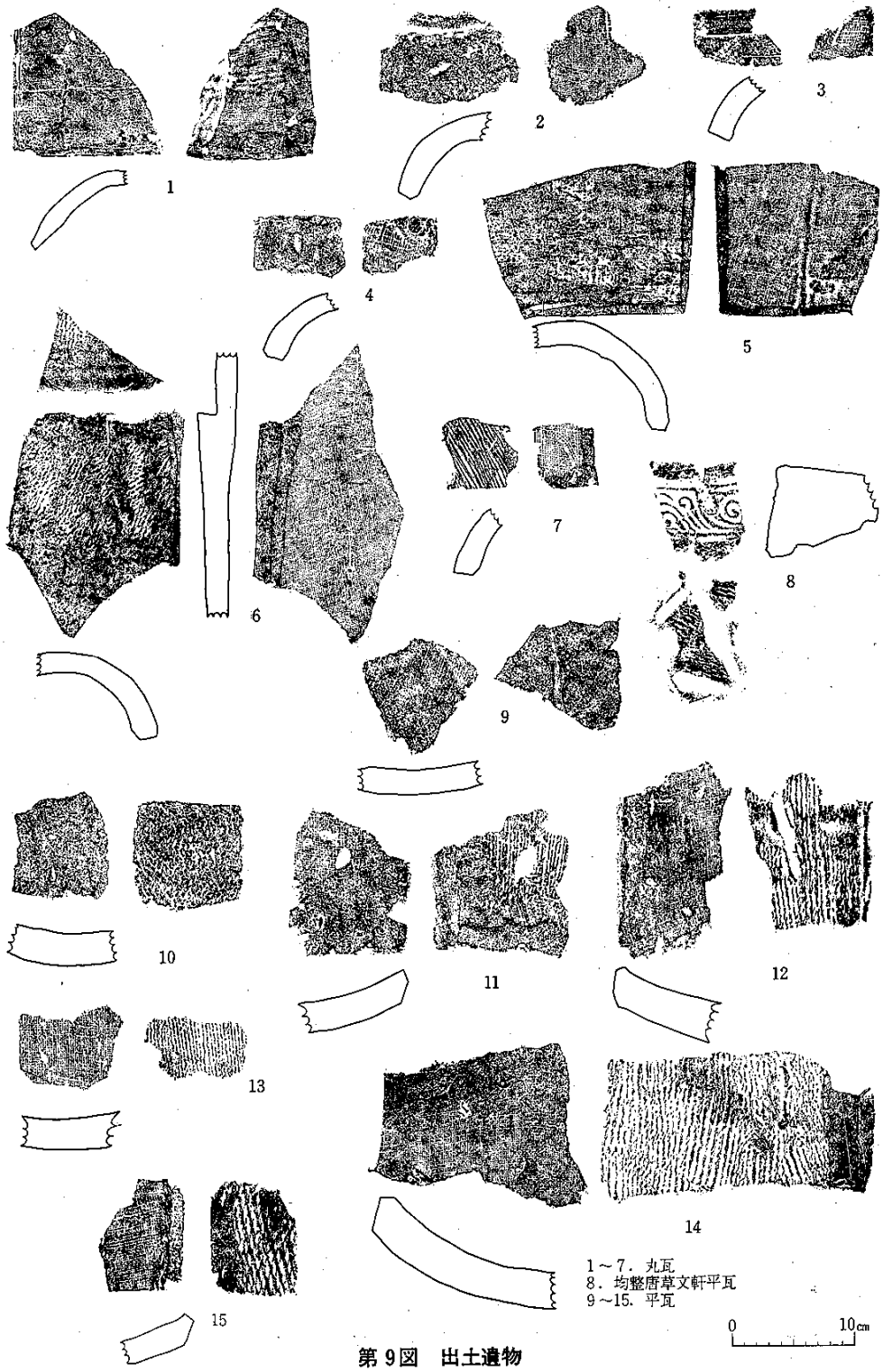
Ⅴ．まとめ

１　今回の調査で発見された遺構は溝２・土壙１である。いずれも時期は限定できないが古代のものと思われる。

２　遺物は土師器・須恵器・瓦・紡錘車・砥石が土土しており、古墳時代後期から奈良・平安時代のものである。

参考文献

氏家　和典（1957）「東北土器の型式分類とその編年」歴史第14輯



第9図　出土遺物

進藤・高野・渡辺　(1975)「多賀城創建瓦の製作技法」『多賀城跡調査研究所研究紀要』ⅢⅡ
東北学院大学栗遺跡調査団（1975）「栗遺跡発掘調査略報」
小井川・手塚　(1978)「糠塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書第53集－宮城県文化財発掘調査喀報（昭和53年度分）』

表1　図示土器観察表

番号	種別	器形	出土地区	層位	ロクロ使用の有無	口径 cm	器高cm	底径 cm	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	分類
1	土師器	坏	FⅠ No.4	溝	無	18.0	4.9		横ナデ	ケズリ	ケズリ		ミガキ・内黒		坏AⅠ
2	〃	〃	〃 〃	3・4層	〃	16.0	3.3		〃	〃	〃		〃		〃
3	〃	〃	〃 〃	溝	〃	14.8	3.1		〃	横ナデ	ミガキ		〃		坏AⅡ
4	〃	〃	No.6	2層	〃	13.9			不明	不明	不明		〃		〃
5	〃	〃	No.4	3・4層	〃	12.4	2.7		ミガキ	ミガキ	ミガキ		〃		坏AⅢ
6	〃	FS C2	第2ミゾ		有	14.1	3.7	5.7	ロクロ		回転糸切り		〃		坏BⅠ
7	〃	FⅠ No.4	3・4層		〃	15.4	4.0	8.6	〃		〃		〃		〃
8	〃	〃	No.3	2層	〃	14.0	3.6	7.4	ロクロ・体部下端手持ケズリ		手持ケズリ		〃		坏BⅡa
9	〃	FⅠ No.4	3・4層		〃			6.6	ロクロ・体部下端回転ケズリ		回転ケズリ		〃		BⅡb
10	土師器	甕	〃 No.4	3・4層	無	18.7			横ナデ	ケズリ		横ナデ	ナデ		甕AⅠa
11	〃	〃	〃 〃	溝	〃	20.4			〃	刷毛目		〃	ヘラナデ		〃
12	〃	〃	No.10	1層	〃	23.6			〃	〃		不明	不明		〃
13	〃	〃	No.4	溝	〃	12.6			〃	〃		横ナデ	ヘラナデ	不明	甕AⅠb
14	〃	〃 〃	〃		〃	16.5	15.3	8.7	〃	〃	木葉痕	〃	〃		甕AⅡ
15	〃	〃 11		2層	有	20.8	(38.6)		ロクロ	ロクロ・ケズリ		ロクロ	ロクロ		甕B
16	〃	〃 〃	〃		〃		(37.6)	9.2	〃	〃		〃	〃		〃
17	高台付坏	〃 No.3		2層	〃			8.0	〃	ロクロ	回転糸切り		ミガキ・内黒		
18	蓋	〃 No.4		3・4層	〃	20.0	5.5	つまみ 4.5	ロクロ→ミガキ・黒色処理			ロクロ→ミガキ・黒色処理			
19	高坏	〃 〃		溝	無			11.1		ケズリ	刷毛目		ミガキ・内黒	刷毛目	
20	甑	〃 〃	〃		〃	17.5	13.3	6.2	横ナデ	刷毛目→ケズリ		横ナデ	ヘラナデ		
21	小形壺	〃 〃	〃		〃		(4.6)	3.2		ケズリ→ミガキ			ヘラナデ		
22	須恵器	坏	〃 No.6	2層	有			7.1	ロクロ		ヘラ切り→ケズリ		ロクロ		
23	〃	〃	No.4	3・4層	〃			8.0		〃	ヘラ切り		〃		
24	〃	〃	No.4	3・4層	〃	13.7	4.9	6.4		〃	回転糸切り		〃		
25	〃	〃 〃	〃		〃			9.8		〃	回転ケズリ		〃		
26	鉢	〃 No.4		溝	〃	14.3	12.3	7.4		〃	手持ケズリ		〃		
27	壺	〃 〃	〃		〃	体径13.6			ロクロ	ロクロ→回転ケズリ			〃		
28	長頸壺	〃 〃	3・4層		〃				ロクロ				〃		
29	線	〃 〃		溝	〃	体径10.6				〃	手持ケズリ		〃		

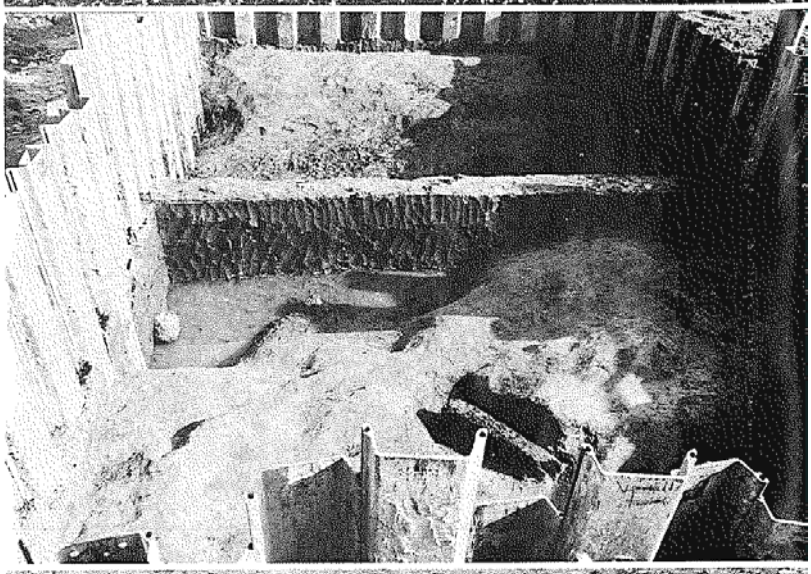
表2　土器・瓦破片集計表

種別・器形	部位	調整など 外(凸)内(凹)	No.12 表採	No.12 表土	No.12 2層	No.12 3層	No.12 4層	No.12 第1溝 埋積土	No.12 第1溝 東壁	No.12 第1溝 底面	No.12 第2溝 埋積土	No.1 2	No.2 2	No.3 2	No.4 3・4	No.4 第1溝	No.4 第1土壙	No.5 1	No.6 2	No.8 2	No.9 2	No.10 1	No.11 2	不明	計
		段あり																							
土師器　杯	ロ～体	ケズリ－ミガキ・内黒													1										1
		ケズリ－ミガキ・内黒														1									1
		ケズリ－ミガキ・内黒													1										1
		ロクロ－ミガキ・内黒													1										1
	ロ縁部	横ナデ－ミガキ・内黒													4	2									6
		横ナデ－ミガキ									2				1										3
		ケズリ－ミガキ・内黒													4		1								5
		ロクロ－ミガキ・内黒							2		4				14	6						1		1	28
		不明－ミガキ・内黒			2	1									7				1				1		12
		不明－不明		2	12	2					24														40
	体部	横ナデ－ミガキ・内黒													1										1
		ケズリ－ミガガ・内黒									1				3										4
		ロクロ－ミガキ・内黒									6				11									1	18
		不明－ミガキ・内黒		2	6	9					16				23			1	2					7	66
		不明－不明	1	3	8	12		9		3	81		1		1	1		2						3	125
高台付杯											2			1	1										4
	底部	糸切り			1						8			1	7	1			1						19
		手持ヘラケズリ														2									2
		回転ヘラケズリ													4								1		5
		不明		3				3		1	34				30	2		1	2		1				77
土師器　甕	ロ～体	ミガキ－ミガキ・内黒													1										1
		(体)刷毛目－ナデ													4										4
		刷毛目－ヘラナデ													3	3									6
		刷毛毛目－刷毛目													1										1
		ケズリ－ナデ													2	1									3
		ケズリ－ヘラナデ													1										1
		ロクロ－ロクロ												1	4										5
	ロ縁部	横ナデ－横ナデ			1						1			1	17	10		1							31
		横ナデ－ミガキ・内黒											1												1
		ロクロ－ロクロ			2						1				16							1	2		22
		不明－不明			1							1			12							1	1		16
	体部	ケズリ－ナデ												3	73	23		2				2	7		110
		－ヘラナデ									3			1	31	36									71
		－ミガキ														2									2
		－ミガキ・内黒												1	4	3									8
		－刷毛目									3				7								3		13
		－不明													11		2								13
		刷毛目－ナデ				2								6	25	19		4					2		58
		－ヘラナデ												1	7	25	2		1			1			37
		－刷毛目									2				12	3							1		18
		－ミガキ														1									1
		－ミガキ・内黒													1	1									2
		－不明									1				10							1	1		13
		ロクロ－ロクロ					1		1		3			1	28	1			1			1	7		44
		ミガキ－ミガキ													1	2									3
		不明－不明	7	57	105	64	1	40	2	1	172			15	164	24	5	16	7			9	22		711
	底部	木葉痕									1			1	11	5	2	2	4						26
		ケズリ												1	12	4									17
		不明									6			2	18	5	1	3				1	2		38
須恵器一杯	ロ縁部			6	8	1		2			29			1	33	2	2	1	3			3		9	91
	体部			7	16	3		4			27		1	2	27	1	1	2				2	8		101
	底部	ヘラ切り			1			3			4			1	11										20
		糸切り			2	1		1			2				14									2	22
		手持ヘラケズリ	1						1		2				2				2						8
		回転ケズリ						1							5										6
		不明			1	3		4		1	11				11	1	1	2				1		4	40
高台付杯									1																1
須恵器　甕	ロ縁部					2		1			9				2	2		1					2	1	20
	体部	平行叩き目－平行	1		2						4				2										10
		－凹	1	2	3	5			1		4				4										20
		－青海波文					1				9				7			1	2			1			21
		－ナデ					1	14			8				3										26
		－格子					1								1										2
		－不明									27	1		2	30	1	1		4				4	1	71
		格子叩き目－青海波文													1	4									5
		－ナデ								1					2								1		4
		－格子あて目													1										1
		－平行あて目													1										1
		－不明						1			1			1	7	1	1		1					1	14
		刷毛目－ナデ																					1		1
		－不明													1										1
		ケズリ－ナデ				1									1										2
		－不明													1										1
		ロクロ－ロクロ	3		2	2																			7
		ナデ－ナデ		1	4	5					1														11
		波状文－ナデ						1			1				1									1	4
		不明－ナデ									7			1	3										11
		－凹									1			1	1										3
		－平行あて目									1				1										2
		－不明	1	4	5	15		13			64	1	1	4	68	1		4	5		2	2	3	13	206
	底部	ケズリ												1											1
		不明	1		2						13			1	2	1									20
	壺 体部				1	1		2	1		2				6	1									14
	底部	高台付									6				5							1			12
	蓋 ロ縁部														4			1					2		7
平瓦		縄叩き目－布目				2					3		2	2	5								2	2	18
		－すり消									1				1										2
		すり消し－すり消		1																				1	2
		－布目	1		1	1					3			1											7
		－不明													1										1
		不明－布目	1		1	1					1	1			3						1			1	10
		縄→すり消－布目										1		1	1									1	4
丸瓦		すり消し－布目	1								3							1							5
		縄→すり消－布目	1		1						2	4			7								1	1	17

図 版 1

No.12竪坑遠景
（南側から）

同　全体



同　第1溝

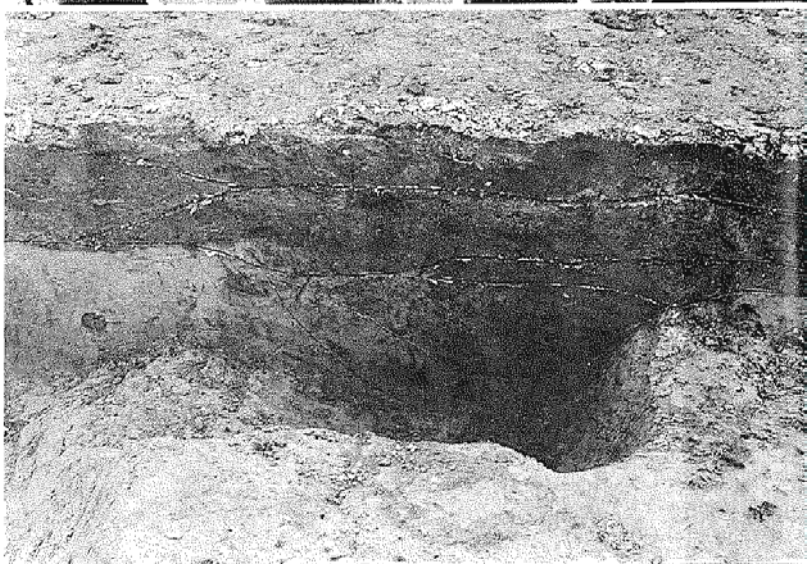
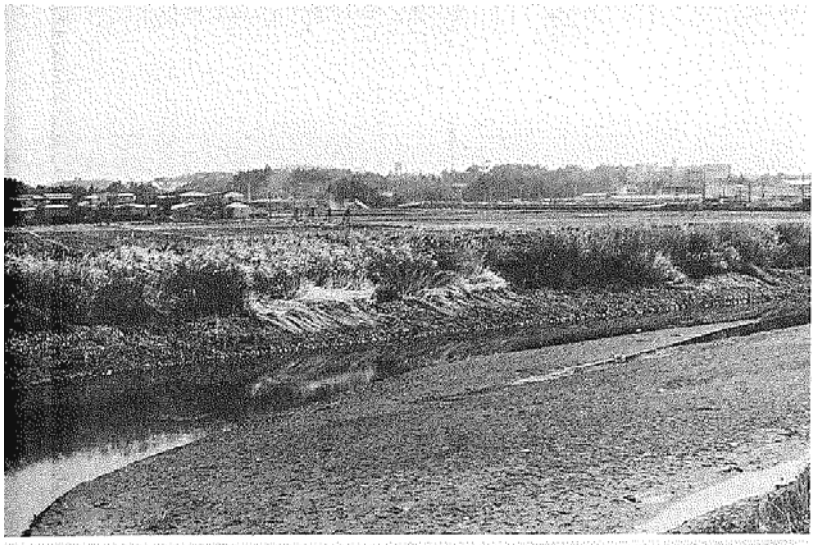
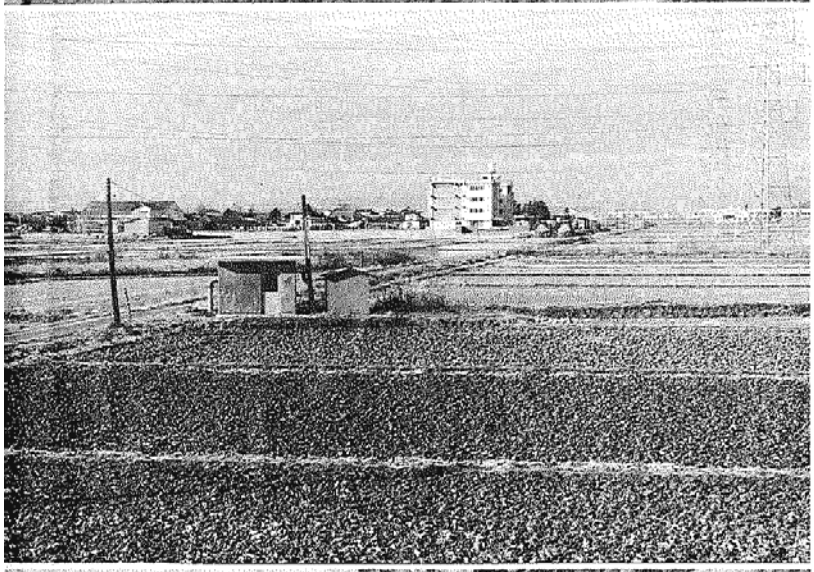


図 版 2



市川橋遺跡遠景

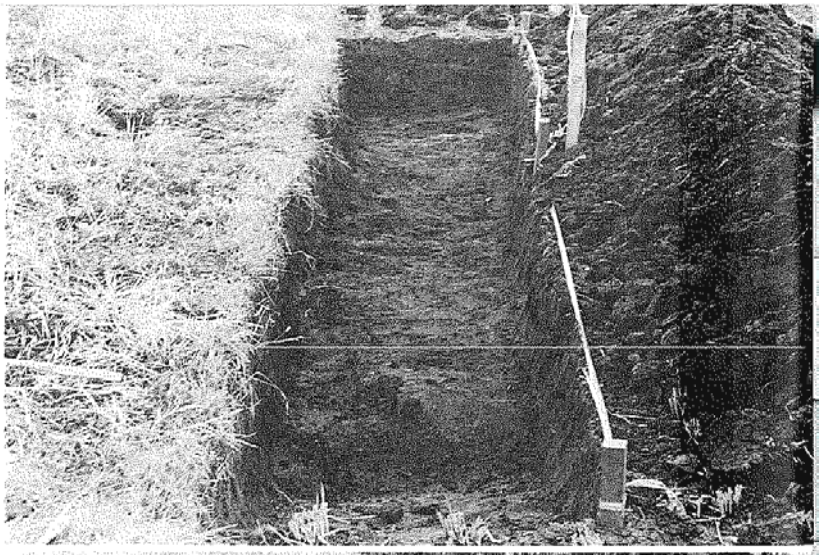


山王遺跡遠景

No. 3 竪坑

図 版 3

No. 5 竪坑



No. 6 竪坑

No. 8 竪坑

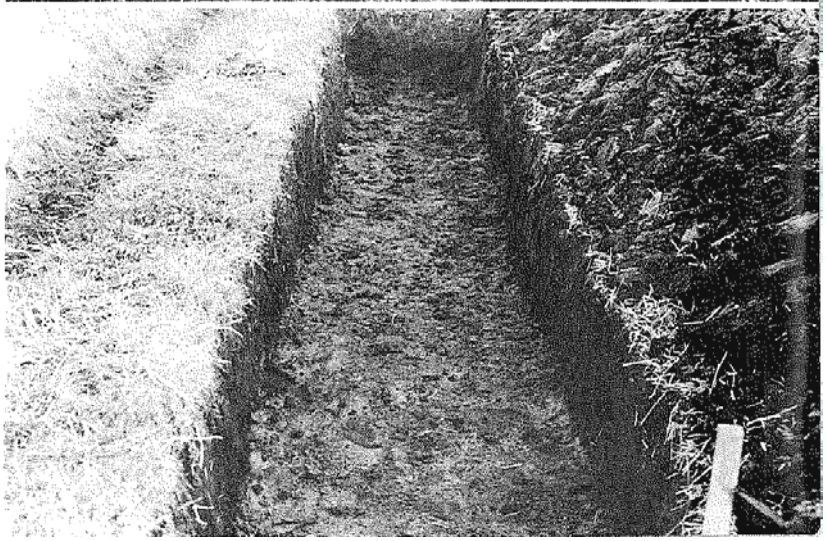
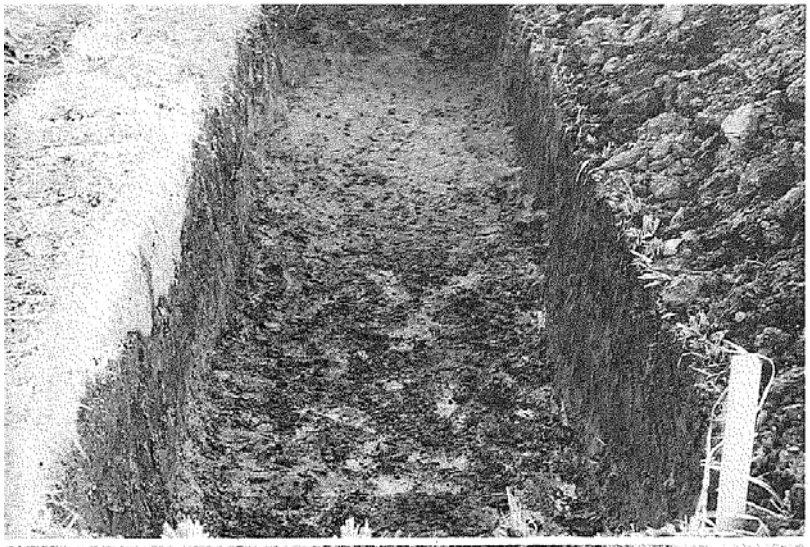
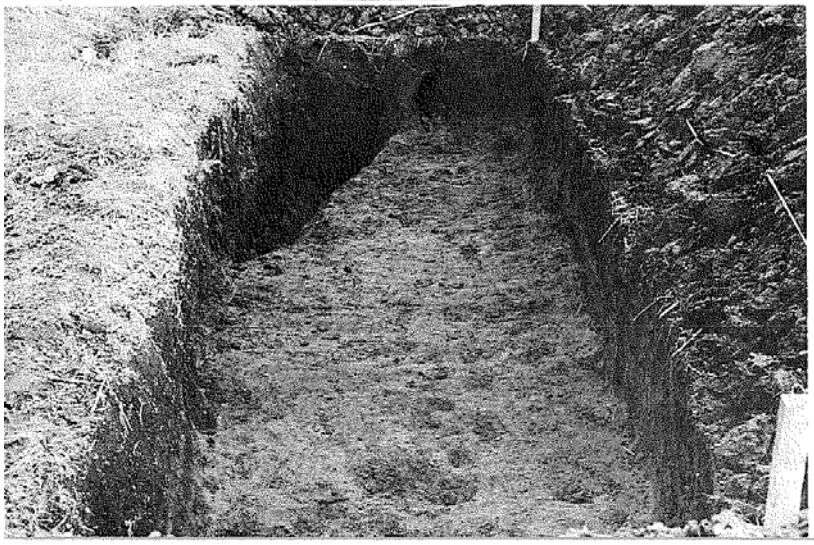


図 版 4



No. 9竪坑

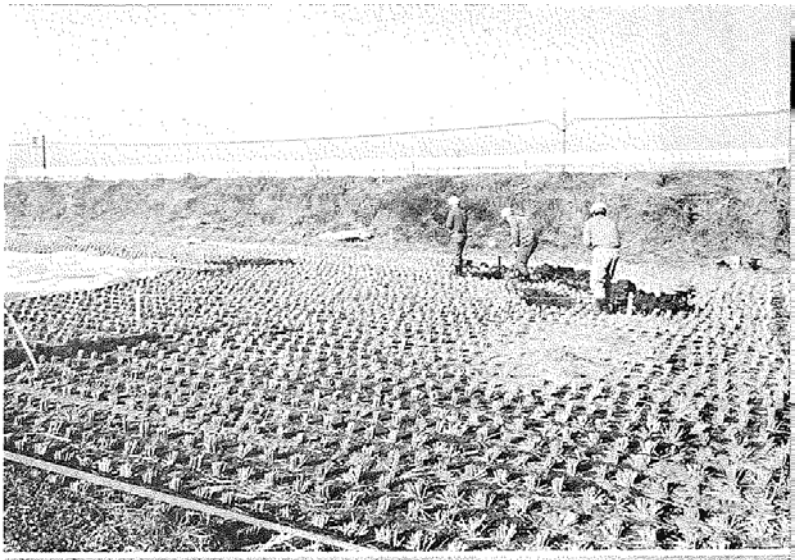
No. 10竪坑



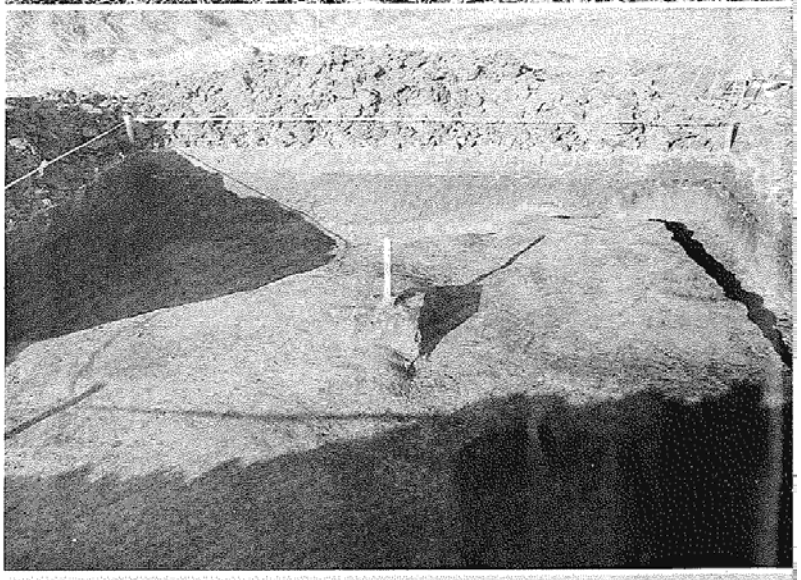
No. 11竪坑

図 版 5

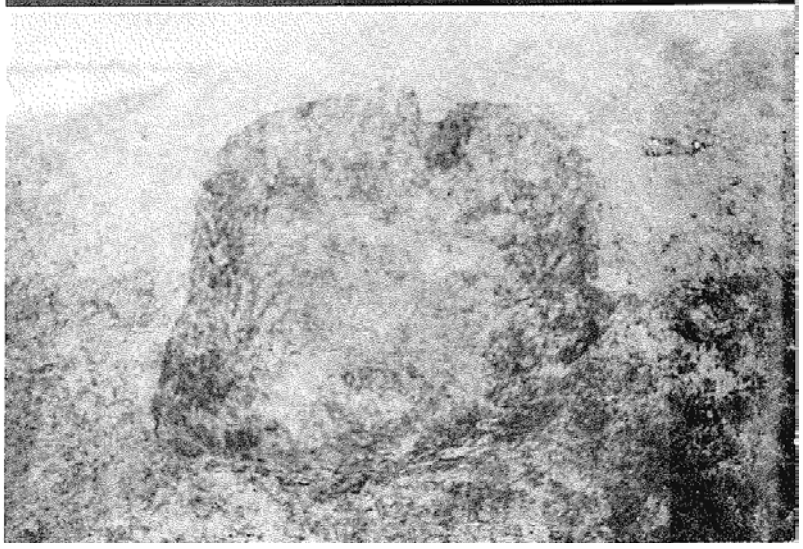
No. 4 竪坑近景同

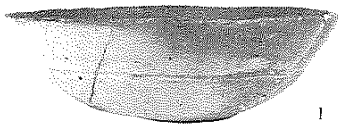


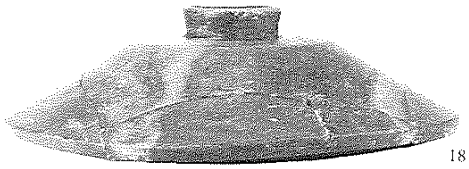
全体同



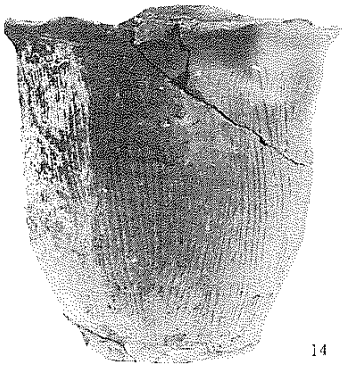
土壙

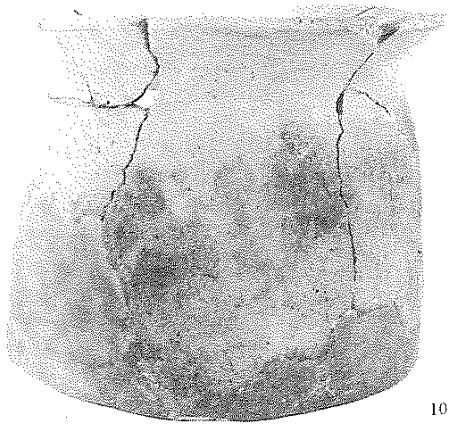


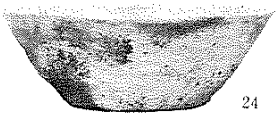

1

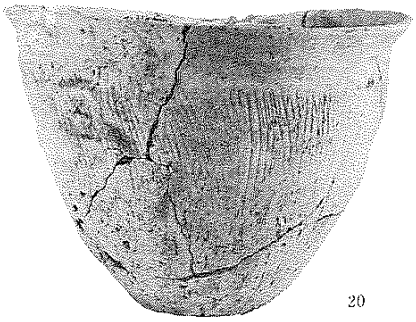

18

3


14

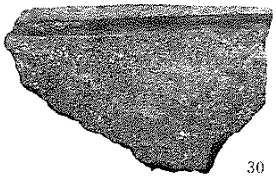

10


24


20

26

31


30

29

出土遺物番号は実測図と共通

図 版 6

(2) 金取（かなとり）遺跡

小井川和夫・加藤道男・丹羽　茂・小野寺祥一郎

遺跡所在地：黒川郡大和町吉田字南

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：昭和53年11月15日～昭和53年11月22日

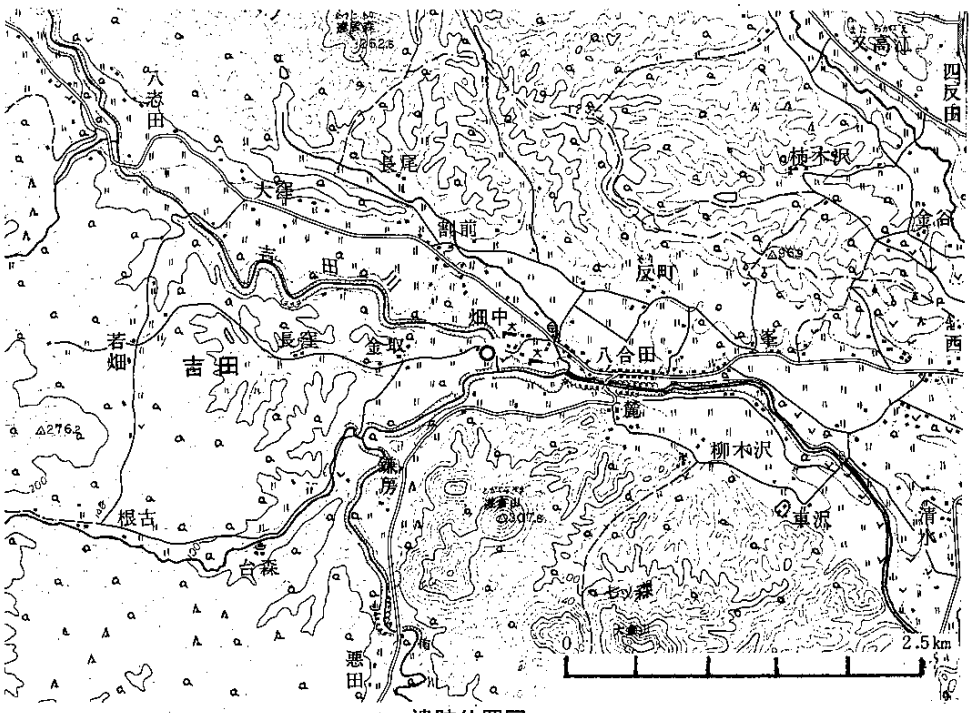
調査面積：350㎡

発掘面積：350㎡

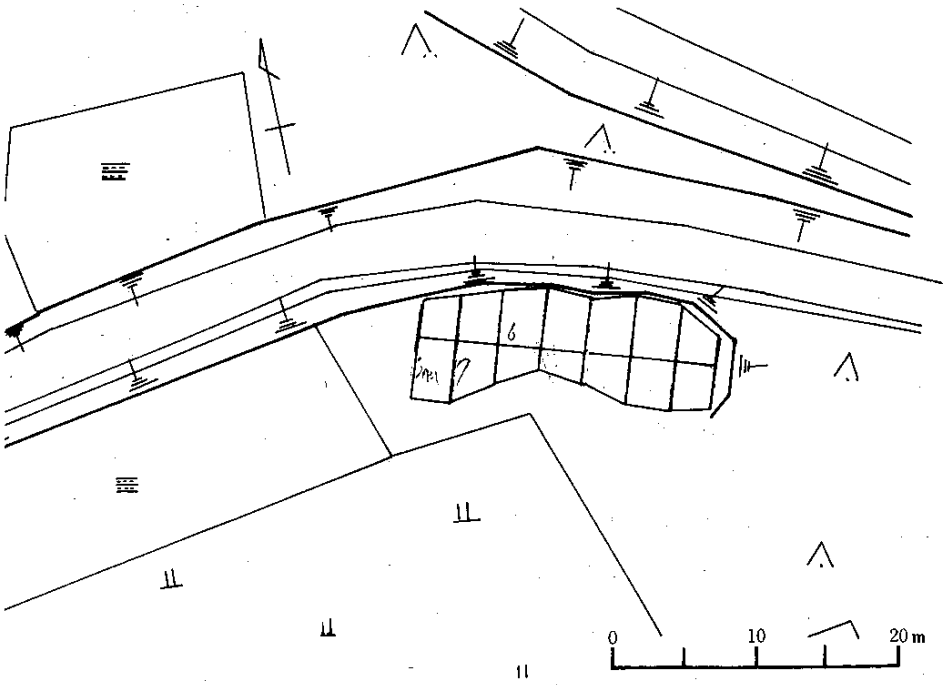
遺跡記号：ＦＧ

遺跡番号：23005

協力機関：大和町教育委員会



遺跡位置図



金取遺跡グリット配置図

１．遺跡の立地

金取遺跡は、大和町吉岡の中心部から西方約4.5km、大和町吉田字南にある。黒川郡境の西を走る奥羽脊梁山脈から派生する２つの丘陵が、ゆるやかに高さを減じて西から東へ延びている。一つは、大和町の南を走る黒川丘陵であり、もう一つは、北方を走る加美・志田丘陵である。また、この両丘陵の間を吉田川が東流している。本遺跡は、黒川丘陵の北端、吉田川によって形成された河岸段丘上に立地している。遺跡部分における標高は、約50mであり、現在は畑地や山林（杉林）として利用されている。遺跡周辺には、根古遺跡（縄文時代中・後・晩期）四十八滝遺跡（縄文時代中期）仁和田利遺跡（縄文時代中期）中峯Ａ・Ｂ遺跡（縄文・平安時代）などが所在し、遺跡分布の密な地域である。

２．調査の概要

本遺跡の調査は、遺跡部分を切土し、現在の農道を拡幅する計画がなされたために緊急に行われたものである。

調査の対象は、切土される部分約550㎡であり、今回の調査では、そのうち、現在の農道の南側に当たる部分約350㎡を発掘した。

調査区全体の表土を剥離した段階で、調査区西側の部分（台地平垣面）では、遺構・遺物を検出することができなかったが、調査区の東側の部分、すなわち、河岸段丘の東縁辺（平垣面から斜面に移行する部分）から縄文時代の遺物包含層を確認することができた。この遺物包含層は、最も厚い部分で約80cmある。層序は、第１層（表土）暗褐色シルト層、第２層黒褐色シルト層、第３層暗褐色シルト層、第４層黒褐色シルト、第５層暗褐色シルト層、第６層暗色褐色シルト層、第７層黒褐色シルト層の７層である。下位の層に行くに従い、ローム粒の混入度を増し、固くしまってくる。出土遺物の大部分は、第１層から第４層にかけて集中して出土しており、第５層から第７層は僅かしか出土しなかった。第１層からは、多量の縄文時代後期初頭南境式土器に混って、少量の縄文時代中期末葉大木10式土器が出土した。第２層から第７層までは、出土した土器の型式に変化がみられず、南境式土器の単純な包含層であった。その他縄文土器とともに、石鏃、凹石、石皿、石斧等の石器が出土した。さらに、この遺物包含層を切っている近世の墓跡が３基検出された。

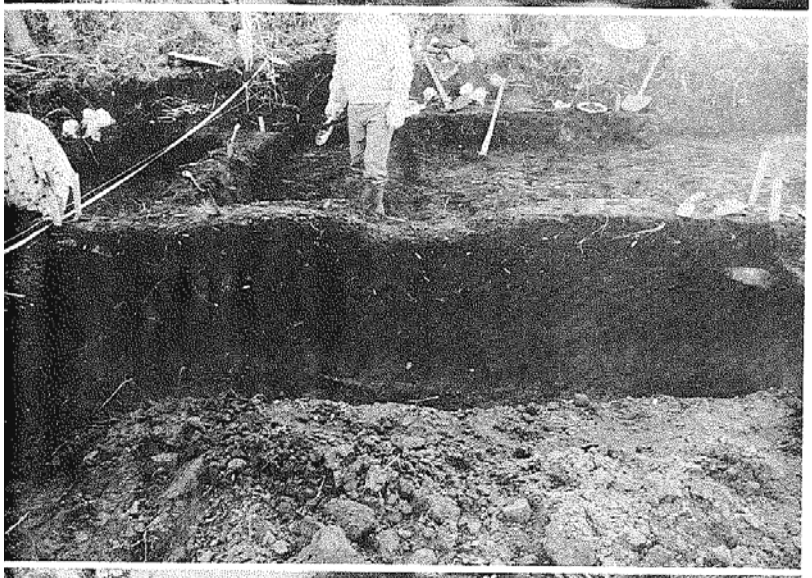
３．まとめ

１　今回の調査で、縄文時代後期初頭の遺物包含層が検出された。

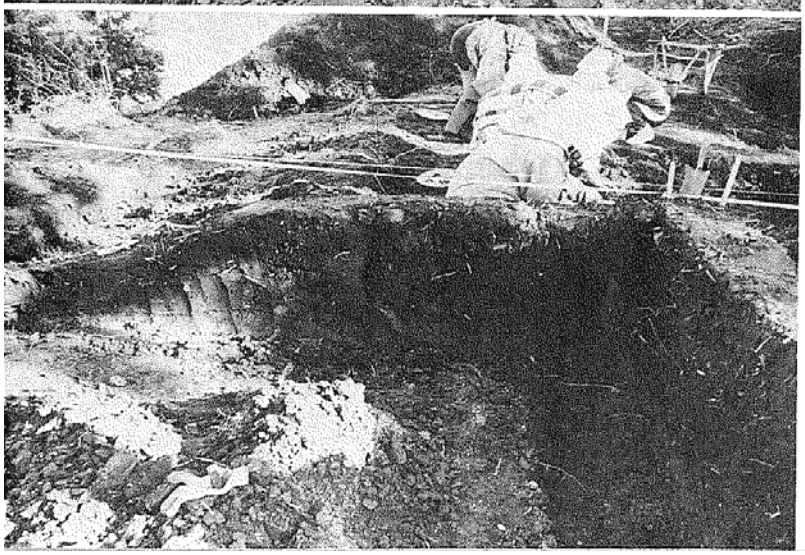
２　調査の結果と周辺の地形から、調査区外に縄文時代中期末葉から後期初頭にかけて営まれた集落跡の存在が推定できる。

（小野寺　祥一郎）

金取遺跡遺跡遠景
（西側から）



遺物包含層の堆積状況
（北側から）



遺物包含層の堆積状況
（東側から）

(3) 桑（こ）折（おり）　城　跡

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過…… 74
Ⅱ．桑折城跡について…… 74
　１．位置と環境…… 74
　２．規模・構造…… 76
　３．文献・伝承…… 77
Ⅲ．発掘調査…… 79
Ⅳ．考　察…… 82

例　　言

１．本書は、緊急急傾斜地防止事業に伴う三本木町所在桑折城跡の立合調査（発掘調査）の結果を記したものである。

２．調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、三本木町教育委員会の協力を得た。

調査員　文化財保護課　　小井川和夫

三本木町教育委員会　佐藤　喜久

３．本書の執筆･編集は、文化財保護課員の協議を得て小井川和夫が行なった。

Ⅰ．調査に至る経過

桑折城跡は、志田郡三本木町大字桑折字蛇沼山地内にまたがる遺跡である。

昭和53年6月12日の夕刻に発生した宮城県沖地震は、県土のいたるところで甚大な被害をもたらしたが、ここ桑折城跡でも被災した。

特に、鳴瀬川に北面する平場北端の崖面は亀裂を生じて崩壊したため、この崖を背にして並ぶ民家にとっては危険な状態となり、防災上の措置を早急に講じられることを当局に強く要望するに至った。そのため、宮城県土木部は同所に対し直ちに緊急傾斜地崩壊対策工事を実施することになった。

宮城県教育委員会および三本木町教育委員会では、この事業計画と係わる遺跡の取扱いについて協議の結果、崖面の法面工・擁壁工の切土にかかる平場面積の地形測量および立合い調査を行なうことにし、それを昭和53年10月２日から４日の間に実施した。調査の要項は下記の通りである。

遺　跡　名：桑折城跡（宮城県遺跡地名表登載番号：33002）
遺跡所在地：宮城県志田郡三本木町大字桑折字蛇沼山
調査主体者：宮城県教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 期 間：昭和53年10月２日～10月４日
調査協力者：宮城県三本木町教育委員会

Ⅱ．桑折城跡について

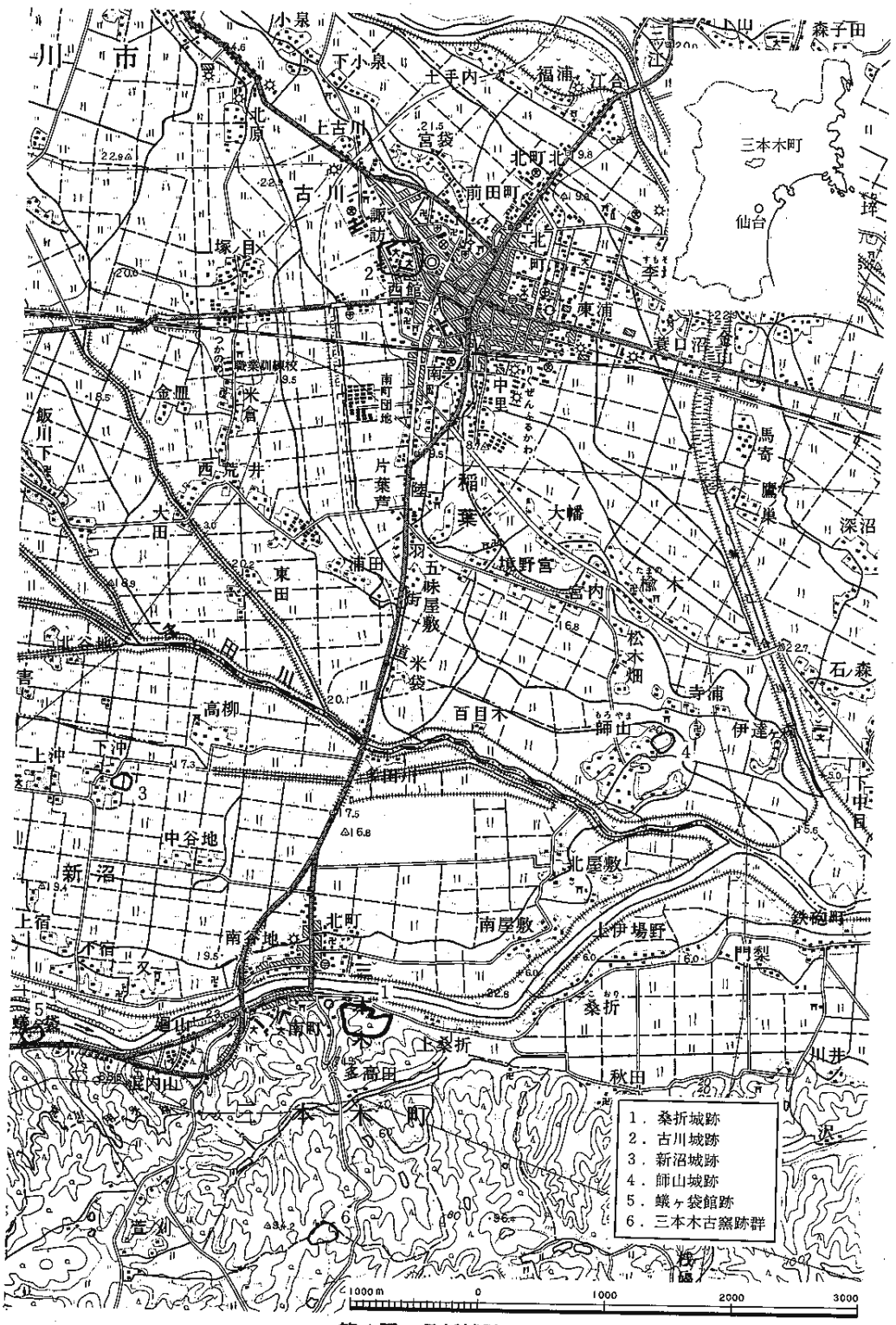
１．位置と環境

桑折城跡は志田郡三本木町桑折に所在する。三本木町はいわゆる大崎平野の南端に位置しており、町の中央部を東西に横切って鳴瀬川が東流し、この川を境として南部は丘陵（大松沢丘陵）北部は平野部とにわかれている。この平野部が大崎平野の南限となる。

桑折城跡は、南部の丘陵上に立地し、頂部からは大崎平野を一望することができる。

また、この地域は交通上の要衝でもある。西方中新田・色麻を経て鳴瀬川の南岸沿いにのびてきた街道が、町西部坂本地区で吉岡方向から北上する街道（奥州街道）とまじわり、さらに東方松山から西進してきた街道と城跡直下で合し、北へ伸びて大崎平野を貫通する。

付近には本城跡の他に、同しく南部丘陵上に斉田館跡（桜館跡）、坂本城跡（天神城跡）、蟻ヶ袋館跡（高館跡）、千貫森館跡（伊賀館跡）、伊場野古城跡など、また平野部にも新沼館跡、師山城跡など多くの城館跡の存在が知られている（第１図）。　桑折城跡を含めて、これらの城館跡


1．桑折城跡
2．古川城跡
3．新沼城跡
4．師山城跡
5．蟻ヶ袋館跡
6．三本木古窯跡群
1000m
0
1000
2000
3000

第１図　桑折城跡の位置

群は、広大な大崎平野のもつ経済力に加えて、交通上の要地としての利点を背景として成立したものであろうと推定される。

なお、城館跡の他に中世に属すと考えられる遺跡としては。桑折城跡の南約 1.5km に所在する三本木古窯跡群(注)がある。この窯跡群のうち多高田窯跡は昭和52年に発掘調査が行なわれ、出土遺物等の考察からその年代は鎌倉時代後期頃と推定されている（藤沼他：1978）

（注）三本木古窯跡群は、当初多高田窯跡のみが確認され、宮城県遺跡地名表では「多高田窯跡」(宮城県教委：1976）として登録されていたが、昭和 52 年、その西側にさらに芦ノロ山窯跡が確認されたために、両者を総合して、「三本木古窯跡」の名称が冠せられた（藤沼他：1978）

２．規模・構造

桑折城跡は、すでに述べたように、鳴瀬川に面してつき出た丘陵上にある。この丘陵は南部から羊歯状に延び、先端部では東西に広がっている。その間ではさらに東方へ数条の尾根が分岐しているが、城跡は、先端の東西方向の丘陵と、そのすぐ南側の東へ分岐した丘陵とにまたがって立地しており、南北二つの郭にわけることができる。北郭は現在、館山公園として整備され、南郭は山林である。いずれも遺構の保存状況は良好である。

北郭は東西約 400m の規模である。この郭は、尾根上を南北に区切る掘り切りによって三部分に分けられている。各部分にはそれぞれ北へのびる小さな尾根がみられ、ある程度の面積の確保を考慮して分割されているものと考えられる。

東側部分は、北郭中最も面積も大きく遺構の配置が整然としている部分である。頂部は標高 55m ほど(比高 32m)でほぼ平担であり、東側にはさらに１m ほど高い一辺約 30m の方形の平場がある。この平場の北辺中央部には門状の遺構がみられ、さらに平場は北にのびて、尾根上に２段の平場が連なっている。北側にのびた平場のうち、上位平場は、方形平場の東側に細長く回りこみ、方形平場東辺南端から方形平場へ登る通路状の遺構となる。今回発掘調査を実施したのは北側の下位平場の先端部である。

なお、東側部分の西端が、本城跡中最も標高の高い部分（61m）であるが、この部分には貯水槽が建てられており旧状は失なわれている。

また、最高所の南側基部から、南郭へ通ずる尾根道がのびている。

中央部分は掘り切りにはさまれた幅 50m ほどの平場であるが、この部分にも展望台が建設されており詳細は明らかでない。東側部分との境をなす掘り切りには巾１m ほどの土橋状の遺構が認められる。

西側部分は、東端から順次西側へ傾斜する地形であり、頂部に、地形に沿って４段の平場がみられる。東西幅は 150m ほどである。

西側部分東端の上位平場北辺に門状の遺構がみられる。その西側の次段平場は北側にのびる

尾根上まで張り出し比較的広い面積を保っているが、この平場の一部は、上位平場の門状遺構の前面まで回り、腰郭的にのびている。平場の西側には堀切があり、その西にはさらに２段の平場が配置されているが、２段ともさほど広いものではない。なお、この西側部分の南斜面は切土されて急崖となっており詳細は不明である。

南郭は、北郭の中央部分から南方約 100m ほどの、尾根から東へ分岐した丘陵上にある。北郭と南郭の間は細い尾根道で連絡されており、北郭際と南側丘陵際には掘り切りがみられる。前者には土橋状遺構がある。

南郭の立地する丘陵全体は東西約 400m ほどであるが、遺構の認められる部分は東半部約 200m の範囲である。遺構は、標高 51m の上位平場と、それより約２m 低く北東へのびる下位平場とからなる。上位平場の南・東部２面および下位平場の西部を除く３面には巾のせまい腰郭的平場が巡っており、それぞれ平場へ通じる通路状の遺構が認められる。また、上位平場の西端つまり南郭の西端には掘り切りがみられ丘陵部と区画されている。

なお、城跡全体にわたって斜面裾部では立木等のために十分な遺構の確認は行っていない。

３．文献・伝承

桑折城に関し「仙台領古城書上」には

「山一桑折城　東西四十九間　南北十間　城主八野木相模。又渋谷トモ云。黒川安藝守晴氏入道月舟叔父。

二之丸　同　十三間　二十二間

」と記している。

また、安永四年「志田郡南方桑折村風土記御用書出」古舘の項に

「一、鶴舘　堅六拾間　横百八拾弐間

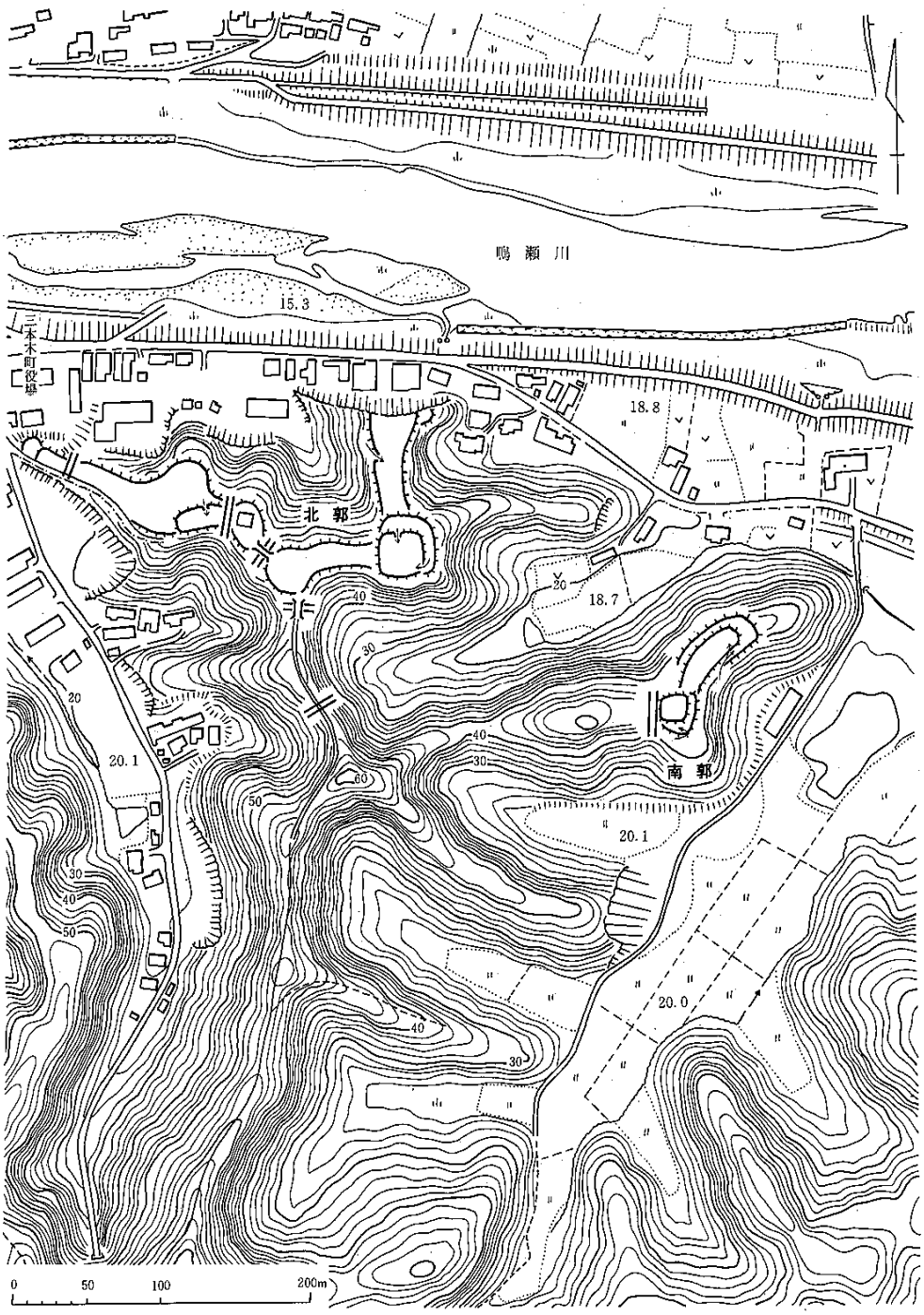
右御城主大崎家臣渋谷相模様之由申伝候処右年月相知不申候事」と記されており、桑折城は鶴舘とも称したことが知られる。

規模の数値等の記載にやや違いはあるが、「封内風土記」、「仙台領古城書立之覚」、「名跡志」、等にもほぼ同内容の記載があり、本城の舘主は、黒川月舟斉と同時代（天正年間）には渋谷氏であったとみられる。

本城が、史上に登場するのは天正年間のいわゆる大崎合戦の際でである。

大崎合戦は、大崎家の内紛に端を発し、大崎氏と伊達氏が、天正十五年（1587）大崎平野を舞台として戦った合戦である。

伊達軍は「…都合三千餘兵。天正十五年亥正月十六日。米澤ヲ打立。同廿三日に遠藤出羽守ヵ居城志田郡松山ニ著陣シテ。軍評定取々ナリ。」そして伊達軍をとりまく状況は「大崎ノ内



第3図　桑折城跡遺構略図

伊達へ加ル輩ハ。マツ岩出山ノ城主氏家弾正隆繼ヲ始トシテ…是等何レモ弾圧カ縁者ナリ。其外ハ皆義隆ノ味方ニ加ハリケリ。」さらに「黒川ノ城主黒川月舟晴氏。兼テハ伊達ノ味方ナリシカ。此度月舟敵トナリ。桑折ノ城ニ入。師山ニモ人數ヲ込オキ。大崎勢ト云合セ。両城道ヲサシハサミ。伊達勢押ヨスルニ於テハ。南北ヨリ合戦仕掛。喰トメント見ユル間」というものであった。

正月二十八日かねての軍議通り「伊達勢松山ノ城ヲ出。段々ニ川ヲコヘテ。先陣ハ師山ノ前ヲオシ通リ。新沼ニカヽリ中新田へ」侵攻した。これに対し「師山ノ城ニコモル輩ニハ。マツ侍大将ニ古川ノ城主古川弾正隆忠・・・・・。南ノ桑折ノ城ニハ渋谷中目ノ一類城主飯川尾張。加勢黒川月舟。其外黒川勢不残籠城シテ。海道ヲ中ニ挾ンデ静リ返テ控ヘタリ……。」

結果的にはこの作戦は失敗し、「先陣ハ引タリ伊達勢散々ニ敗軍シテ。新沼ノ城へ逃コモル。新沼ハ上野甲斐居城。甲斐ハ遠藤出羽聟ニテ伊達ノ味方也。」

合戦は、人質をさし出し、和議が成立して終結した。

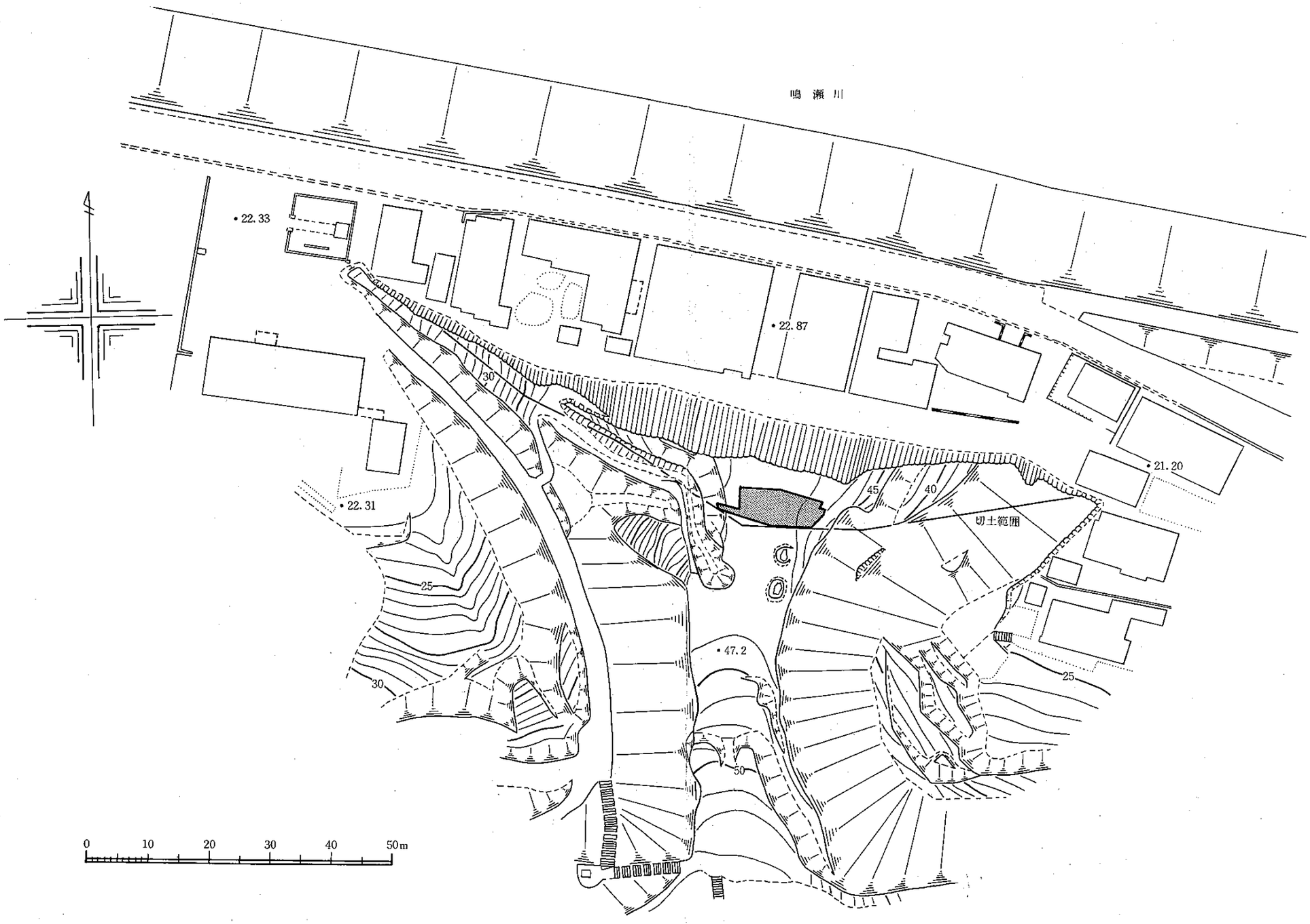
その後大崎義隆は中新田の城に居たが、秀吉の奥州仕置に際し所領が没収され、それとともに桑折城も廃城となったと伝えられる。

Ⅲ. 発掘調査

発掘調査地点は、北郭から北へのびる平場の先端部である。この平場は東西 15m、南北 70m のかなり広い面積を有する平場である。東縁北部には、東斜面を登ってくる通路状遺構に対応して門跡と考えられる遺構が認められる。この平場は、現在北端部は急崖となって平地に至っているが、かつては河岸まで迫っていたとの事で先端東側斜面には平場の一部が残存している。

始めに平場部分の測量を行ったのち、緊急急傾斜地防止事業にかかる切土部分約 190 ㎡を対象として発掘調査を行った。しかし対象区北端部は、表土部分を残し下部が崩落して庇状になっ

第 4 図　大崎合戦における桑折城



第５図　北側平場平面図

ており危険な状態にあったため発掘対象範囲から除外した。突発掘面積約 70 ㎡である。

調査の結果、表土下 10cm で地山に達し、地山面で多数のピットが検出された。ピットは径 20～50cm ほどのものであるが、柱痕跡が明瞭に認められたものも多く、これらのピットは掘立柱建物跡に伴う柱穴と考えられる。しかしながら調査面積が少ないため建物跡の規模等を推定できるような柱穴の組み合せは抽出できなかった。柱痕跡は径 10cm 前後である。柱穴の中には重複関係の認められるものもあり、複数の時期に亘って建物が存在していたことがうかがわれる。

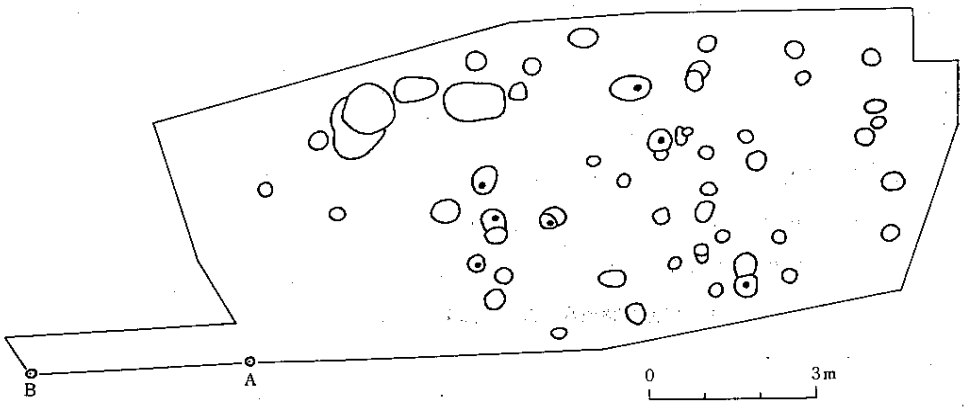
また平場東縁には、整地作業に伴う盛土が認められ、平場面積確保のための造成が行なわれていることが確認された。なおこの造成工事は同時に斜面の傾斜を増す上での効果をも合せ持っていたものと考えられる。

出土遺物はない。

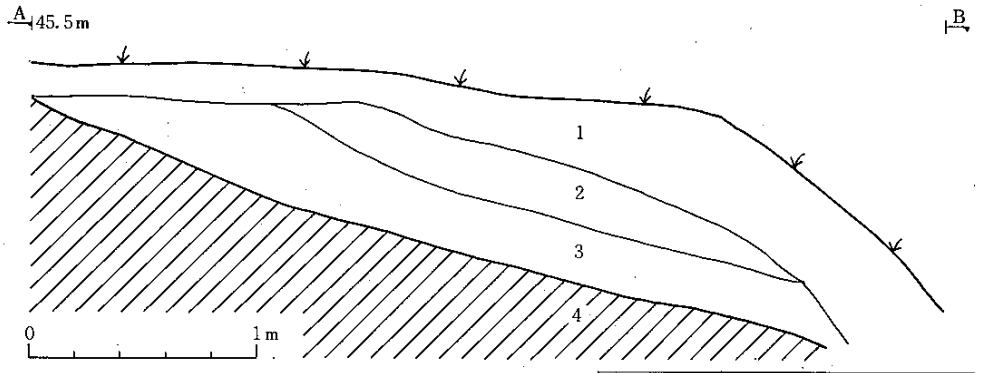
Ⅳ. 考　察

すでに述べたように桑折城は、大崎平野を一望する丘陵上に立地している。この大崎平野は中世においては河内とよばれ、ここには文治５年（1189）渋谷、大掾、泉田、四方田のいわゆる河内四頭が封ぜられたと「餘目記録」には記されている。このようなことから大崎平野は中世でもかなり早い時期から開発が行なわれたとみられる。そして、この平野を経済的基盤として成立したと思われる桑折城も、その歴史は中世末天正年間で終わっているが、存続年代はより遡ると考えられる。ことに本城は、その規模、整然とした遺構の配置等からみて大崎地方でも屈指の城跡であり、重要な役割を演じたと考えられ、短期間でその歴史を閉じたとは考え難い。今回の調査でも、柱穴にかなりの重複が認められたことは、ある程度それを裏付けるものであろう。

遺構についての問題点としては、南限が不明確である点である。一般的には、丘陵を利用し



第 6 図　発見遺構



	土　　色	土性	備考
1	黒かっ色(10YR　2/2)	シルト	表土
2	暗かっ色(10YR　3/3)	〃	地山盛土
3	黒かっ色(10YR　2/1)	〃	旧表土
4	かっ色(10YR　4/6)	〃	地山

第７図　平場縁断面図

て築城する場合には、それと区画する何らかの施設を有するのが通常であり、本城跡内部にはその種の遺構（掘り切り）が数ヶ所認められる。南限を確定することは、すなわち城の範囲を確定する点で重要であり、今後、その種の遺構の存在の有無の確認を含めて、留意する必要がある。

引用参考文献

「仙台領古城書上」『仙台叢書』所収

「志田郡南方桑折村風土記御用書出」『宮城県史25』

「仙台領古城書立之覚」『宮城県史30』所収

「封内封土記」『仙台叢書』所収

「対内名跡誌」『仙台叢書』所収

「余目記録」『宮城県史30』所収

「伊達秘鑑」『仙台叢書』所収

宮城県志田郡役所（1912）「志田郡沿革史」

佐々木　慶　市　（1957）「中世史Ｉ」『宮城県史１』

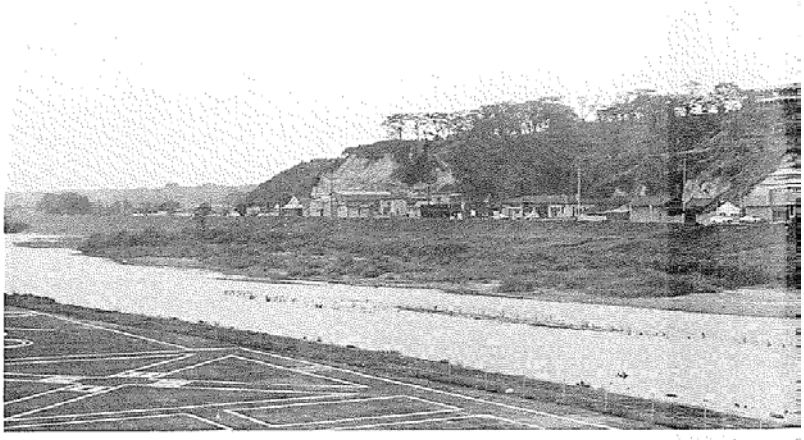
紫　桃　正　隆　（1973）「仙台領内古城・館（第三巻）」

宮城県教委　　（1976）「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書第46集』

藤　沼　邦　彦他（1978）「多高田窯跡調査報告書」『三本木町文化財調査報告書第４集』

図 版 1

1．城跡遠景
（北西方向から）



2．調査地点
（南方向から）

3．北側平場門状遺構

図 版 2

1．北郭頂部平場

2．北郭南斜面の通路状遺構

3．南郭丘陵際の掘り切り

図 版 3

1．発掘区ピット

2．同上

3．平場縁の状況

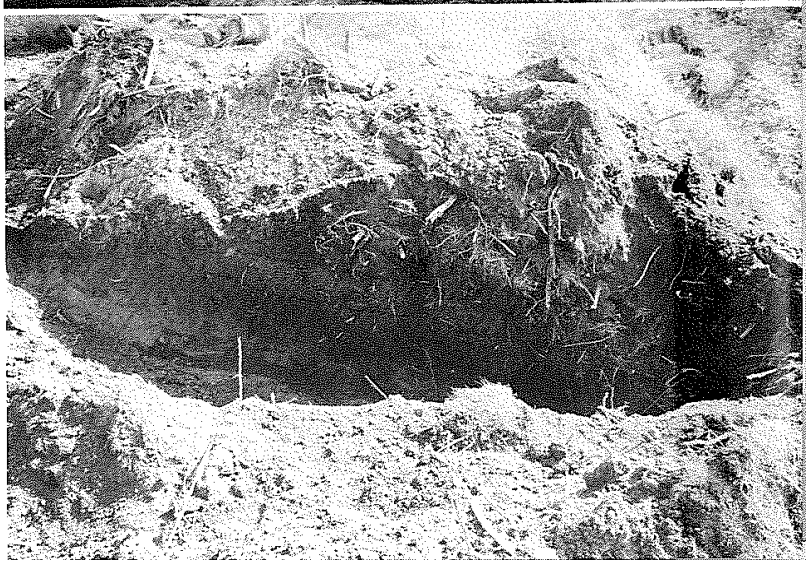
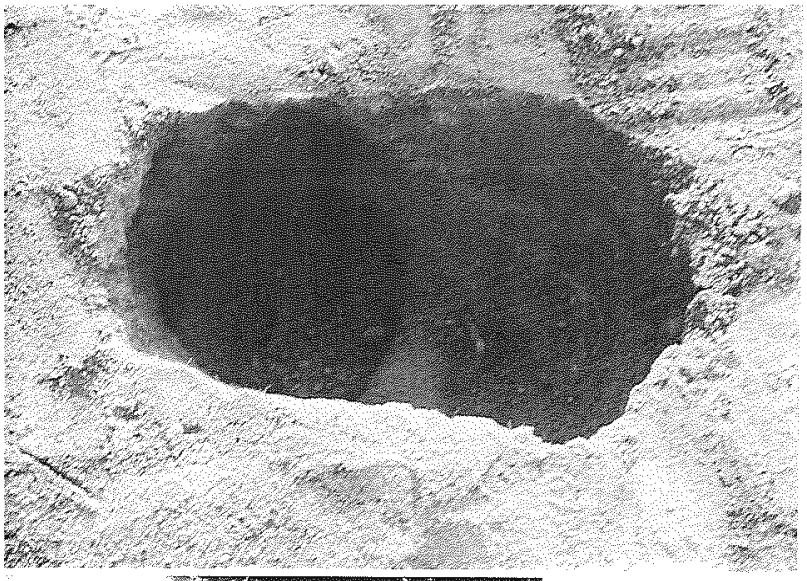
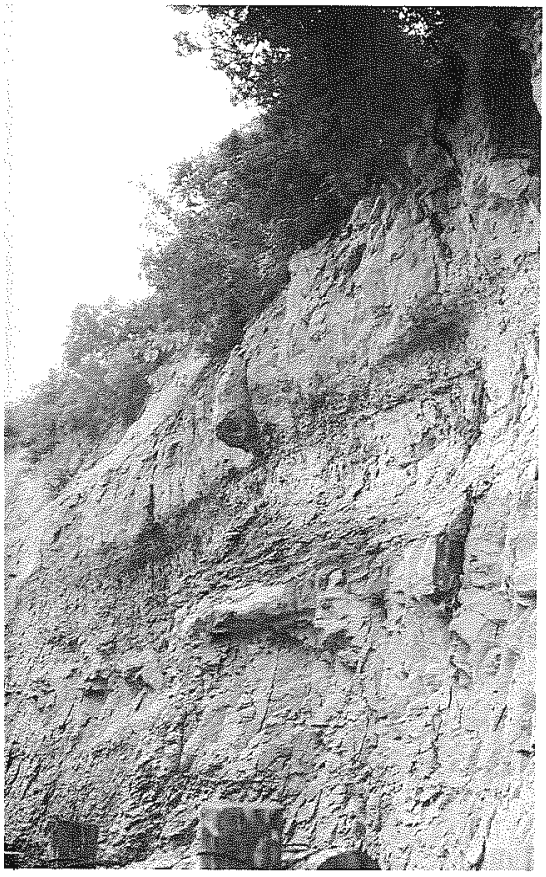


図 版 4



1．柱穴



2．平場北端崖の状況